

## 第5章 梅田六ツ塚遺跡の調査

### 第1節 遺跡の立地と層序(第118～123図、表59、PL.73)

梅田六ツ塚遺跡は、大山北麓から派生する丘陵上に位置する。調査地の標高は約46～51mで、北方に広がる日本海へ向けて緩やかに傾斜する台地状の地形を示す。また、丘陵一帯を縫うように大小の谷が開析されており、調査地の南側～南西側にかけては、調査地際付近より斜面となり、調査地外は谷地形となっている。谷を挟んだ南側の丘陵上には、梅田萱峯遺跡が所在する。

調査前の現況についてであるが、調査地南半は植林地として利用されていた。南～南西側の谷への流出のためか、表土下にはローム層が露出する。一方、調査地北半には古墳が所在し、墳丘の高まりが2箇所確認された。ただ、一帯は畑地として戦後を中心に開発されており、少なからず改変を受けていた。後述するが、このたび調査した4基の古墳のうち梅田19号墳は墳丘が完全に削平されていた。

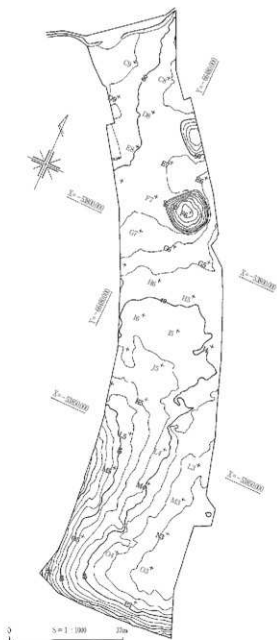
調査地内の堆積については、調査地西壁の北寄りにはトレンチを設定したほか(第121図)、調査地東壁際(K3グリッド付近、第123図)に位置する掘乱坑の壁面を利用し、基本層序の記録を行った(第120図)。以下、その概要を述べる。

I層：表土。土壌化が進行し、しまりが弱い。調査地全体に約20cm程度の厚さで堆積する。

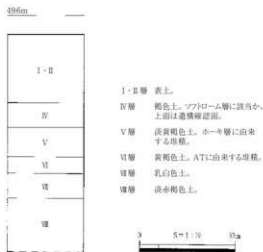
II層：褐色土。調査地北半に堆積する。下位に堆積するIII層上面で畝状の浅い落ち込みが確認され、当層がそれを埋めている。主に戦後に開発された畑地に関わる堆積とみられ、当層も表土として扱った。



第118図 調査地位置図



第119図 調査前地形測量図



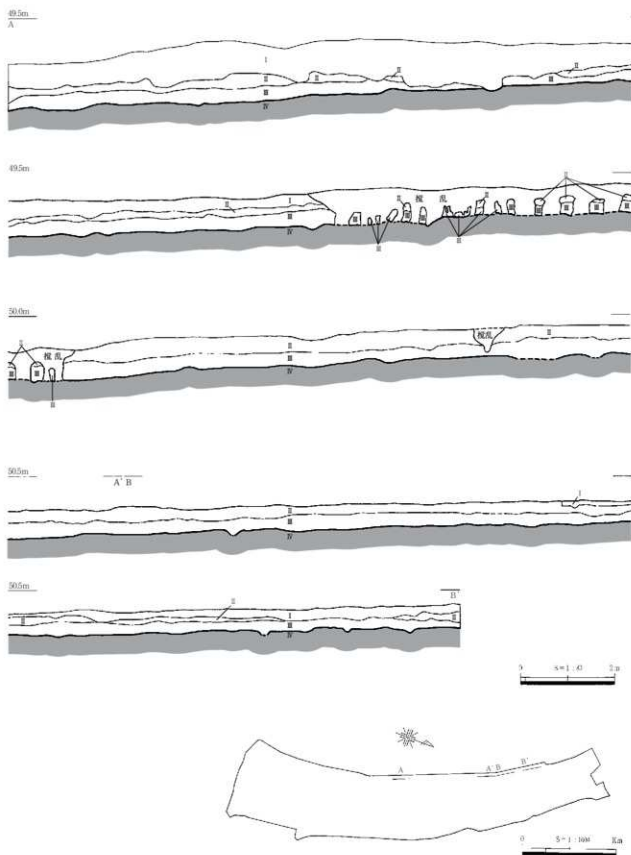
第120図 調査地基本層序

- III層：黒褐色土。調査地北半に堆積しており、堆積範囲を第123図に示した。調査地北端では削平のため残存していないが、当層上面で古墳の墳丘が構築されていることから、旧地表面を形成していたと考えられる。ただ、調査地南側で検出した遺構(SX1等)の埋土に当層に由来するものは見られないため、南側には堆積していなかったと推察される。縄文～弥生時代中期頃の遺物を主に包含するが、出土量は少ない。そのうち、局部磨製石斧S1(第122図)を図化した。
- IV層：褐色を呈する。ほぼ調査区全体にわたり認められる堆積である。いわゆるソフトローム層が上層や土壌化の影響を受け、変色したものか。III層堆積範囲が限られていたため、主に当層上面が遺構検出面となった。
- V層：淡黄褐色を呈する堆積で、大山上部火山灰層であるホーキ層に由来するものと考えられる。
- VI層：黄褐色を呈する。始良Tn火山灰(AT)に由来する堆積と考えられる。
- VII層：乳白色を呈するローム層である。
- VIII層：淡赤褐色を呈するローム層である。本調査で検出された遺構のうち、古墳周溝の深い箇所では当層まで掘り込まれている。

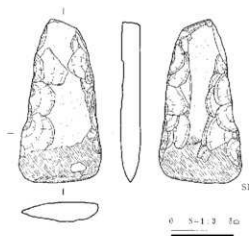
## 第2節 調査の概要(第123図、表47・48)

梅田六ツ塚遺跡では、古墳4基、配石墓1基、土坑4基、溝16条、ビット3基を検出した。全体的に遺構密度、遺物量共に希薄であった。遺構名称については調査時と報告時で異なるため、表47に対照一覧を示した。

第3節では、本遺跡の主要な遺構である古墳の調査成果を報告する。古墳は調査地北側に分布しており、4基確認された。これらの古墳は梅田古墳群に属し、そのうち梅田19号墳は周溝のみの調査であったが、新規発見の古墳である。15号墳は後世の攪乱を受けていたが、埋葬形態が明らかとなり、副葬された須恵器がほぼ完形の状態で出土した。16号墳は墳裾部分を



第121図 調査地土層断面図



第122図 III層出土石器

土坑は調査地内に点在するが、形態的な特徴から落とし穴と目されるSK 1以外は、出土遺物も無く、帰属する時期・性格ともに不明である。ただ、16号墳周溝内で検出されたSK 2・3は、古墳築造以前と考えられる。また、調査地北東端ではピットを3基確認し、表48に各ピットの規模や埋土についての一覧を示した。

調査地北端、中央部では溝を15条検出した。SD 8を除いては、規模などの特徴はほぼ似通っている。16・19号墳の周溝と一部の溝が重複するが、いずれも溝が周溝埋土を掘削しており、少なくとも古墳周溝の埋没以降に構築された遺構群と考えられる。溝のうち、走向がほぼ同様なものや等間隔に並ぶものがあり、相互の関連性が窺える。遺物は埋土中からわずかに出土しているが、明確な時期を示す資料に乏しい。

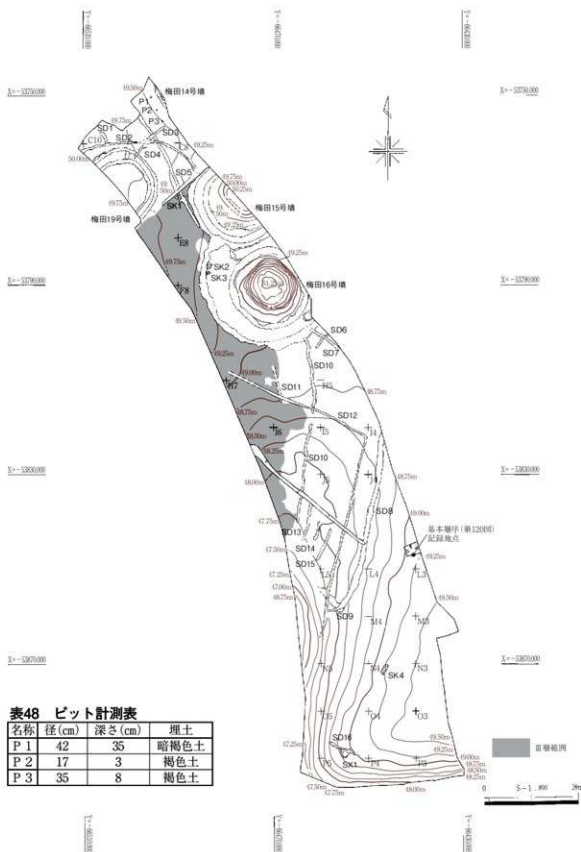
そのほか、調査地南側から中央にかけて黒曜石を中心とする石器が表土中、もしくはローム層上面よりある程度出土している。石鏃や楔形石器などに加え、剥片や砕片、未成品も含まれており、当地周辺での石器製作の可能性を示唆している。

失っていたものの、概ね良好な状態で墳丘が残存しており、墳丘盛土中から赤彩された須恵器坏身が出土した。また、15号墳と16号墳は周溝が一部重複しており、両古墳の構築順序についても明らかとなっている。14号墳は、調査地外に墳丘の高まりが確認でき、周溝の端が調査地の北東端をかすめていた。

古墳以外の遺構については、帰属する時期を明確に示す遺物に乏しいため、第4節でまとめて報告することとした。調査地南側では、配石墓を1基(SX 1)確認した。墓壇内に礫を粗雑ながら配し、埋葬施設としたと推察される。墓壇底面で鉄製小刀が出土している。

表47 梅田六ツ塚遺跡新旧遺構名対照表

報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名	報告時遺構名	調査時遺構名
梅田14号墳	梅田六ツ塚1号墳	SD 1	SD14	SD10	SD11
梅田15号墳	梅田六ツ塚2号墳	SD 2	SD 2	SD11	SD 5
梅田16号墳	梅田六ツ塚3号墳	SD 3	SD 3	SD12	SD 7
梅田19号墳	梅田六ツ塚4号墳	SD 4	SD 1	SD13	SD10
SX 1	SX 1	SD 5	SD16	SD14	SD 9
SK 1	SK 8	SD 6	SD12	SD15	SD 8
SK 2	SK 5	SD 7	SD13	SD16	SD 5
SK 3	SK 3	SD 8	SD 6		
SK 4	SK 2	SD 9	SD15		



第123図 遺構配置図

## 第3節 古墳の調査成果

## 1 概要(第124図、表49)

梅田六ツ塚遺跡では、古墳4基を発掘調査した。これら4基が属する古墳群は琴浦町及び大山町にまたがって分布しており、「梅田」の他に琴浦町では「六塚」、大山町では「栄田」の名称<sup>1)</sup>が使われてきた。古墳名称を整理する必要から琴浦町教育委員会、大山町教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターで協議を行い、古墳群を「梅田古墳群」という名称で統一を行った(表49)。以下では統一した名称を用い、必要に応じて統一前の名称を括弧内に併記することとする。

梅田古墳群のうち、発掘調査が実施されたのは今回の調査を含めて7基である。墳丘や主体部に調査が及んでいるのは梅田12号墳(栄田1号墳)・梅田15・16号墳の3基に留まり、古墳群の様相を推し量るのは困難だが、過去に実施された調査成果を踏まえ、梅田古墳群の概要について触れる。

梅田六ツ塚遺跡の北西隣では、中山町(現大山町)教育委員会により平成12・13年度に試掘調査が、13年度に発掘調査が実施され、梅田12～14・18号墳(栄田1～3・7号墳)が調査されている(西尾2002、西尾ほか2002)。梅田12号墳は径15～16mの円墳で、埋葬施設は堅穴系の本棺とされる。埋葬施設掘方埋土中には大小の円礫が散乱し(一部は現位置を保持している)、棺の裏込めや棺床に敷いたと推定されている。周溝は全周せず、立地する緩斜面の高所側にのみ巡る。出土遺物から6世紀後半～7世紀初頭に比定される。梅田13・14号墳は後世の削平を受けているものの、墳丘が現存しており、周溝のみ調査が行われている。梅田14号墳については、周溝の一部が本調査地内にもかかっている。梅田18号墳は、県道下市赤碓停車場線が新設された際に墳丘を失っているが、周溝の一部が調査され

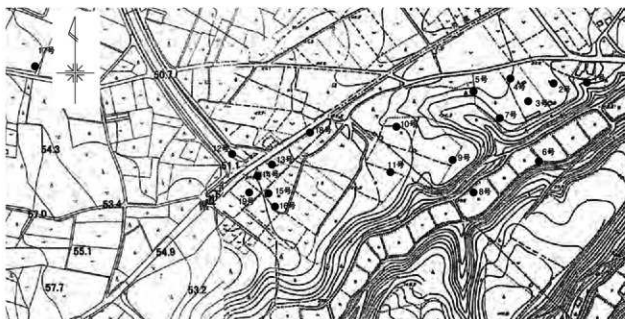


表49 梅田古墳群古墳名称対照表(無記載の古墳については別称無し)

名称	琴浦町名称	大山町(旧中山町)名称	名称	琴浦町名称	大山町(旧中山町)名称
梅田6号墳	六塚10号墳	—	梅田13号墳	六塚1号墳	栄田2号墳
梅田7号墳	六塚8号墳	—	梅田14号墳	六塚2号墳	栄田3号墳
梅田8号墳	六塚9号墳	—	梅田15号墳	六塚3号墳	栄田4号墳
梅田9号墳	六塚7号墳	—	梅田16号墳	六塚4号墳	栄田5号墳
梅田10号墳	六塚5号墳	—	梅田17号墳	—	栄田6号墳
梅田11号墳	六塚6号墳	—	梅田18号墳	—	栄田7号墳
梅田12号墳	—	栄田1号墳	梅田19号墳	新規発見	—

第124図 梅田古墳群古墳分布図

た。その結果、周溝を含め径約18mの円墳と推定されている。

梅田15・16・19号墳は、今回調査を実施した。ただし、梅田15号墳は墳丘の約半分が調査地外である。次項で詳述するが、15・16号墳は周溝の重複関係、出土遺物から15号墳→16号墳の順に、6世紀前葉～中葉にかけて築造されたことが判明した。梅田19号墳は、墳丘を削平によって完全に失っており、周溝のみの調査となった。周溝内からの遺物が少なく、詳細な年代については不明である。

残る未調査の古墳であるが、開発等により墳丘が消滅した例は少なくない。調査地近隣に所在した「六ツ塚運動場」が造成された際に1基、六ツ塚運動場の南側開墾時に1基、圃場整備の際に梨園内に所在した梅田17号墳(栄田6号墳)が消滅したという(西尾ほか2002)。

梅田古墳群に関して、簡単にまとめると、調査例からは、6～7世紀初頭の築造と考えられる。埋葬施設は竪穴式で、横穴式石室を採用した例は確認されていない。埴輪については、近辺に所在する坂ノ上古墳群、御崎古墳群、別所古墳群では出土しているが、梅田古墳群での出土例はない。(加藤)【註】

(1)以下の報告書では栄田古墳群という名称を使用している。

西尾秀道編2002『町内遺跡発掘調査報告書』中山町教育委員会

西尾秀道ほか2002『栄田古墳群』中山町教育委員会

## 2 古墳

### (1)梅田14号墳(第125図、PL.82)

本遺構は調査区北東隅の平坦面、A・B 8グリッドに位置する。表土除去後、IV層直上において溝の一部を検出した。溝の東側の大半は調査区外に残存するものと思われる。溝の北東約4.9mの調査区外には、14号墳の墳丘が現況で確認できる。墳丘との位置関係から判断し、検出した溝は14号墳南西側周溝の一部である可能性が高いと思われる。14号墳周辺の現況は耕地または雑木林であり、北側の周溝の一部は道路整備にともなう事前調査が行われた後、消滅している(西尾ほか2002)。本遺構の南東側約15.6mには15号墳、南西側約11.5mには19号墳が隣接する。

検出面の標高は概ね49.2～49.4mである。確認できた周溝の規模は、検出面での幅が約0.6m、検出面からの深さは約60cmである。断面形はU字状を呈すと思われる、上部はやや外反する。埋土は上～中層では黒褐色土が主体となし、下層には褐色土が

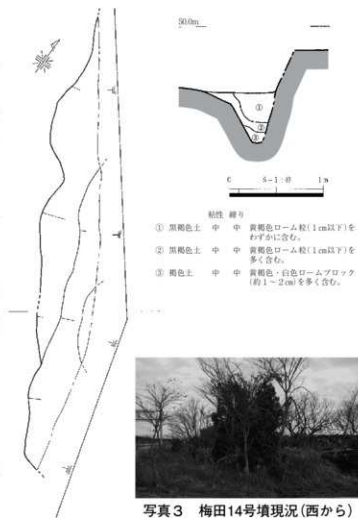


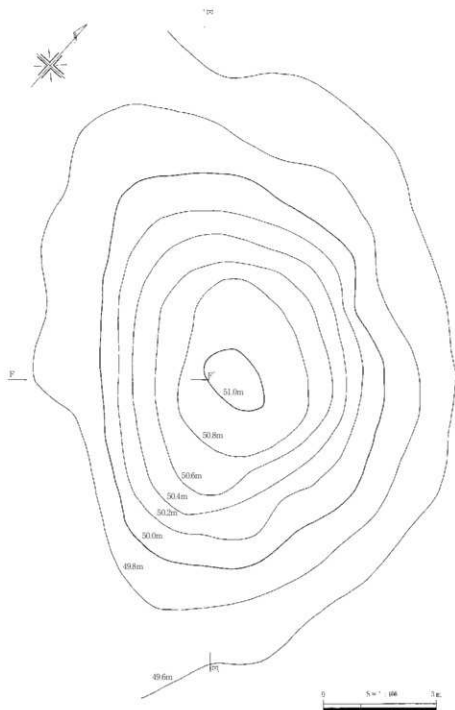
写真3 梅田14号墳現況(西から)

第125図 梅田14号墳発掘

堆積する。周溝内には埋葬施設などの痕跡は認められない。また、周溝内より遺物は出土していない。

なお、平成13年度調査(西尾ほか2002)で検出された周溝の所見では、掘方が二段掘りの様相を示すとあり、周溝北側と南西側では形態が異なるが、埋土の色調は類似するものと思われる。

本遺構は平成13年度調査、本調査ともに時期を特定できる遺物の出土がみられず、古墳築造時期を判断するのは困難である。しかしながら、梅田古墳群内において、築造年代が特定できる梅田12・15・16号墳から判断し、6～7世紀代のものである可能性は高い。(森本)



第126図 梅田15号墳調査前測量図



## (2) 梅田15号墳(第126～133図、表50・58・59、PL.73～77・85・86)

15号墳は、調査区北側の平坦面、標高およそ50mの高さに立地する。周辺には北西側に14号墳、西側に19号墳、南側に16号墳が位置する。15号墳はその半分ほどが調査区外に位置することから、南西側の半分ほどを調査対象とした。

15号墳の調査前の状況は、調査区内に位置する南西側は近年の耕作等により、大きく削平を受けた状況であったが、墳頂部にあたる調査区際付近は削平の影響をあまり受けていなかったことから、高さ約1.2mの高まりとして確認できた。

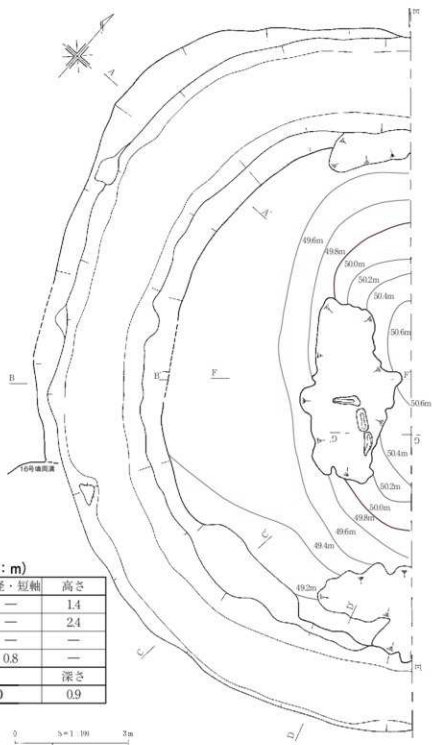
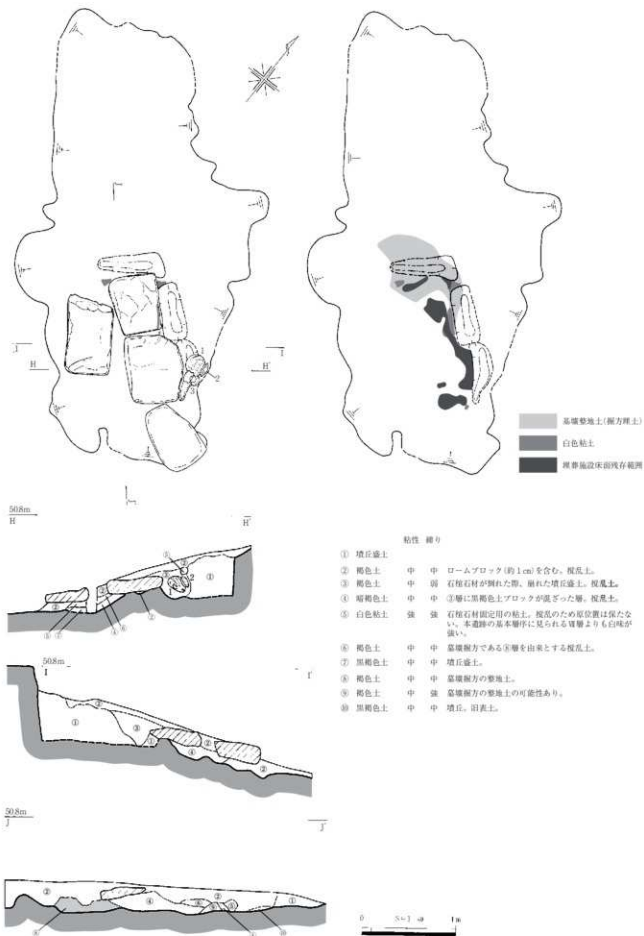


表50 梅田15号墳計測表(単位: m)

	長径・長軸	短径・短軸	高さ
墳丘(周溝上場内周)	13.5	—	1.4
墳丘(周溝下場内周)	14.6	—	2.4
墳丘(周溝上場外周)	18.3	—	—
埋葬施設	1.8	0.8	—
	幅		深さ
周溝	3.0～4.0		0.9

第127図 梅田15号墳完掘



第128図 梅田15号墳埋葬施設調査状況

本墳には厚さ約20cmを測る表土が堆積するが、表土下の状況としては、墳丘斜面部には墳丘上位からの流土は認められず、墳丘盛土、及び削りだされた当時の旧表土と考えられる黒色土層(Ⅲ層)が検出される状況であった。墳丘の範囲は周溝内側の上場で南北約13.5mを測る。また、葺石や埴輪などの外表施設などは認められず、テラス面の有無も、墳裾を削るように近年の耕作が及ぶため、明らかでない。墳形は、調査範囲は半分ほどであったが、調査区外に残存する墳丘や周溝の形状から円墳と思われる。

墳丘中央西側においては埋葬施設に用いられたと判断される4つの石材が西方向に倒れた状態で確認された。これらの石材は南側の一石が扁平な川原石を未加工のまま用いられるが、残りの三石は板状に加工されている。石材周辺、及びその下部に攪乱土が堆積する状況から、近年の掘削等により倒壊されたものと判断され、石材、攪乱土を除去したところ、副葬された須恵器のほか、石材を棺として設置した痕跡と考えられる溝(以下、石材設置溝)が認められた。

副葬された須恵器は、ほぼ完形の坏、提瓶、甗の3点が認められるが、後述の石材設置溝の上位に位置すること、周辺の土が攪乱土であることから、石材が倒壊した際、棺外に副葬されていたものが移動したものと判断される。

石材設置溝は北側に1石、東側に2石分が認められた。それぞれの石材設置溝の規模は、推定される範囲も含め、北側のもので、長さ約70cm、幅約20cm、深さ約10cm、東側北寄りのものが、長さ約60cm、幅約22cm、深さ約14cm、東側南寄りのものが、長さ約65cm、幅約20cm、深さ約12cmを測る。また、この石材設置溝の縁辺、及び倒壊した石材の棺下部にあたる部分には、石材の設置を安定させるために用いられたと思われる白色粘土も認められた。この白色粘土は、その遺存状況が限られることから、石材間の隙間を埋める目張りとしても用いられていたかは不明である。

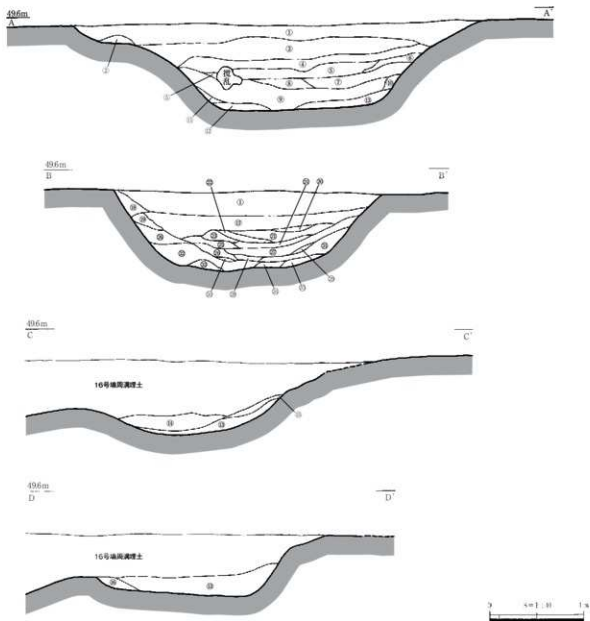
以上、石材の形態や石材設置溝の状況から埋葬施設は箱式石棺であったと考えられる。石材設置溝の遺存状況から、小口壁1石、側壁2石と判断され、規模はおおよそ180×80cmほどのものであったと思われる。主軸は、N-50°-Wを向き、埋葬頭位は棺の形態からは不明であるが、副葬品である須恵器は南側から出土する。なお、石棺床面は基盤層にあたる旧表土上面よりも若干高い位置にある墳丘盛土中に位置する。なお、埋葬施設を構築する際の掘方については、近年の掘削による攪乱の範囲が大きく、規模、掘り込み面等は不明であるが、棺の北側にあたる部分では、棺床面を構築する際に整地したと考えられる埋め土(第128図⑧層)が認められる。

周溝については幅約4m、深さ約80cmの溝が弧状にめぐる。掘削の深さは、旧表土である黒色土(Ⅲ層)上面からⅧ層まで及ぶ。南側においては16号墳周溝と切り合い関係にあり、16号墳周溝を掘削した際に、15号墳周溝埋土が削られることが埋土の状況から判断される。また、16号墳周溝は一部15号墳墳丘も削平するが、埋土に切り合いが認められることなどからも、16号墳構築時においては、15号墳周溝はすでに埋没過程にあり、墳丘部分も一部崩落していたと考えられる。

周溝の最終埋没は、15号墳周溝埋土上層から奈良時代の土器が出土することから、奈良・平安時代ころと考えられる。16号墳周溝においても、最上層の埋土を15号墳と共通させることから、ほぼ同時期に埋没したものと判断される。このことは両周溝最上層から出土した土器4が接合することからも可能性が高い。

さて、墳丘盛土の状況であるが断削りの結果、以下のことが明らかとなった。

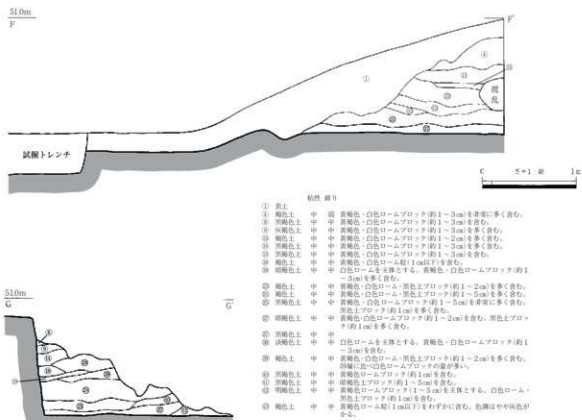
墳丘は旧表土上面に構築されるが、第1工程として、旧表土上面には外側厚さ約15cm、内側厚さ5



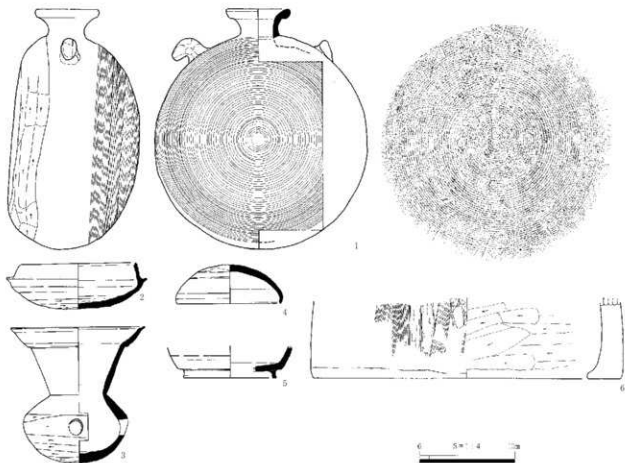
	粘性	締り		粘性	締り
①	暗褐色土	中	⑬	暗褐色土	中
②	淡褐色土	中	⑭	暗褐色土	中
③	暗褐色土	中	⑮	暗褐色土	中
④	褐色土	中	⑯	暗褐色土	中
⑤	暗褐色土	中	⑰	褐色土	中
⑥	褐色土	中	⑱	褐色土	中
⑦	黒褐色土	中	⑲	黒褐色土	中
⑧	黒褐色土	中	⑳	暗褐色土	中
⑨	暗褐色土	中	㉑	浅黄褐色土	中
⑩	黄褐色土	中	㉒	褐色土	中
⑪	暗褐色土	中	㉓	暗褐色土	中
⑫	暗褐色土	強	㉔	暗褐色土	強
⑬	暗褐色土	中	㉕	褐色土	中
⑭	暗褐色土	中	㉖	暗褐色土	中
⑮	暗褐色土	中	㉗	暗褐色土	中
⑯	暗褐色土	中	㉘	暗褐色土	中
⑰	暗褐色土	中	㉙	暗褐色土	中
⑱	褐色土	中	㉚	暗褐色土	中
㉑	暗褐色土	中	㉛	暗褐色土	中
㉒	暗褐色土	中	㉜	暗褐色土	中
㉓	暗褐色土	中	㉝	暗褐色土	中
㉔	暗褐色土	中	㉞	暗褐色土	中
㉕	暗褐色土	中	㉟	暗褐色土	中
㉖	暗褐色土	中	㊱	暗褐色土	中
㉗	暗褐色土	中	㊲	暗褐色土	中
㉘	暗褐色土	中	㊳	暗褐色土	中
㉙	暗褐色土	中	㊴	暗褐色土	中
㉚	暗褐色土	中	㊵	暗褐色土	中
㉛	暗褐色土	中	㊶	暗褐色土	中
㉜	暗褐色土	中	㊷	暗褐色土	中
㉝	暗褐色土	中	㊸	暗褐色土	中
㉞	暗褐色土	中	㊹	暗褐色土	中
㉟	暗褐色土	中	㊺	暗褐色土	中
㊱	暗褐色土	中	㊻	暗褐色土	中
㊲	暗褐色土	中	㊼	暗褐色土	中
㊳	暗褐色土	中	㊽	暗褐色土	中
㊴	暗褐色土	中	㊾	暗褐色土	中
㊵	暗褐色土	中	㊿	暗褐色土	中
㊶	暗褐色土	中			
㊷	暗褐色土	中			
㊸	暗褐色土	中			
㊹	暗褐色土	中			
㊺	暗褐色土	中			
㊻	暗褐色土	中			
㊼	暗褐色土	中			
㊽	暗褐色土	中			
㊾	暗褐色土	中			
㊿	暗褐色土	中			

第129図 梅田15号墳周溝土層断面図



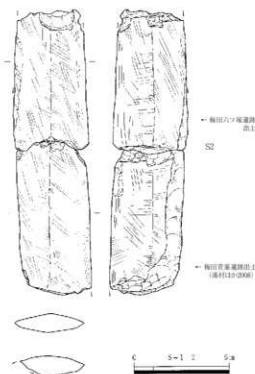


第131図 梅田15号墳丘断面剖状況(2)



第132図 梅田15号墳出土土器

cmと、やや凹レンズ状に黒褐色土により整地がされる(第130図④層)。第2工程として、整地した黒褐色土外縁に堤状に厚さ20cm程度の盛土を行う(第130図⑤～⑥層)。第3工程は、墳裾まで及ぶ近年の耕作によって判然としないが、第2工程でさらに凹状を呈するようになった内側部分を、外縁にできた堤上面ほどの高さまで埋めたようである。北側に広がる⑬層、南側に広がる⑱層の高さがほぼ直線的なラインになることから、このラインまでが第3工程の盛土と思われる。第4工程としては、第3工程までに見られた墳丘を構築するうえで大きな単位は現況では認められないが、第3工程まででできた盛土平坦面に、黒褐色土、黄褐色土などの土を互層に積んで盛土が行われる。以上のように盛土が行われる工程が整理できたが、これらの盛土は、ほぼ周溝を掘削した際に出た土を盛ったと判断される。互層状に盛土がされることから、黒褐色土など旧表土に由来する土が所々で見受



第133図 梅田15号墳丘盛土中出土石剣

けられるが、大きくは現地の旧表土から周溝底面までの層序を逆転させた関係にある。

本古墳に伴う出土遺物には、棺外副葬された須恵器3点がある。1の提瓶は、扁平な体部の片面を膨らませ、同心円状の掻き目が施される。肩部には左肩部の吊り手は破損しているものの鈎状の吊り手が左右に付く。口縁部の形態は断面が丸みを帯びた三角形である。2は坏で、口径12.0cm、蓋受け径14.9cm、高さ4.1cmを測る。口縁部は、内面に段を有する形態である。3は甕である。そろばん玉のような体部には回転ヘラケズリが施され、1箇所穿孔される。口頭部の長大化はみられず、口縁端部は内面に段を有する。以上15号墳に副葬された須恵器は、在地産であるか、他地域からの搬入品であるかは不明であるが、いずれも陶邑で生産された須恵器のMT15の特徴を有することから、MT15併行、6世紀前葉頃のものと考えられる。そのほかの出土遺物には、周溝内から出土したものと、坏蓋4、高台坏5、甕6が見られる。6の甕に関しては、いつごろのものかは不明であるが、4の坏蓋は、陶邑編年TK217併行と思われることから7世紀中頃、5の高台坏は、坏底部に高台が付く位置から奈良時代、8世紀後半頃のものと思われる。

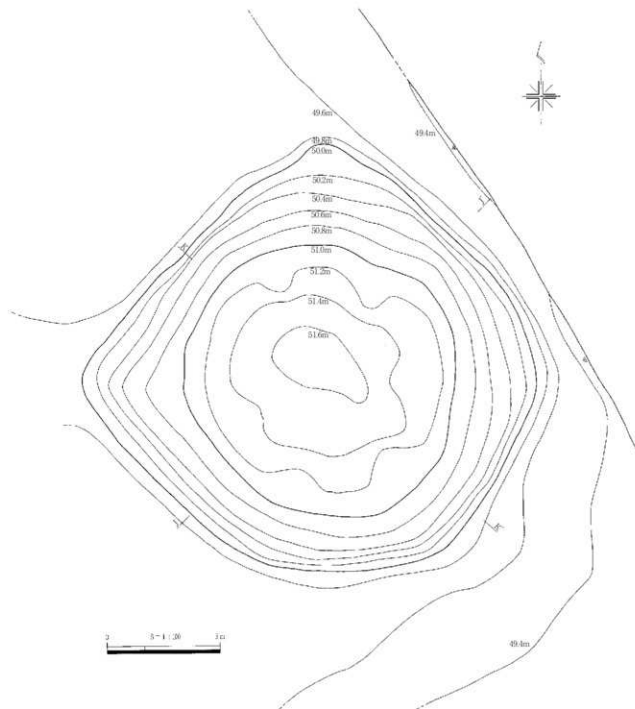
また墳丘断面中(第131図④層上面)、両面に錆をもつS2の磨製石剣の刃部破片が出土したが、この破片は隣接する梅田萱峯遺跡(湯村ほか2008)出土の石剣と接合した。隣接する遺跡とはいえ、両遺跡間は直線で460mの距離にある。弥生時代の遺構が存在しない本遺跡にどのような理由で、磨製石剣が持ち込まれたかは不明であるが、遺跡間接合という非常に珍しい発見となった。(野口)

### (3) 梅田16号墳(第134～140図、表51・52・58・60、PL.73・74・78～81・86)

本古墳は調査地北側の尾根部、D6・7、E5～7、F4～7、G5・6グリッドにまたがる平坦地に位置し、15号墳の南側に近接する。15号墳と同様に、墳丘裾部は近現代における当地周辺の畑地開発によって削平されており、原形を留めていない。表土除去後、Ⅲ層上面において周溝を検出した(第135図)。周溝の平面形態から本古墳は円墳と考えられる。墳丘裾部が失われているため、墳丘際のテ

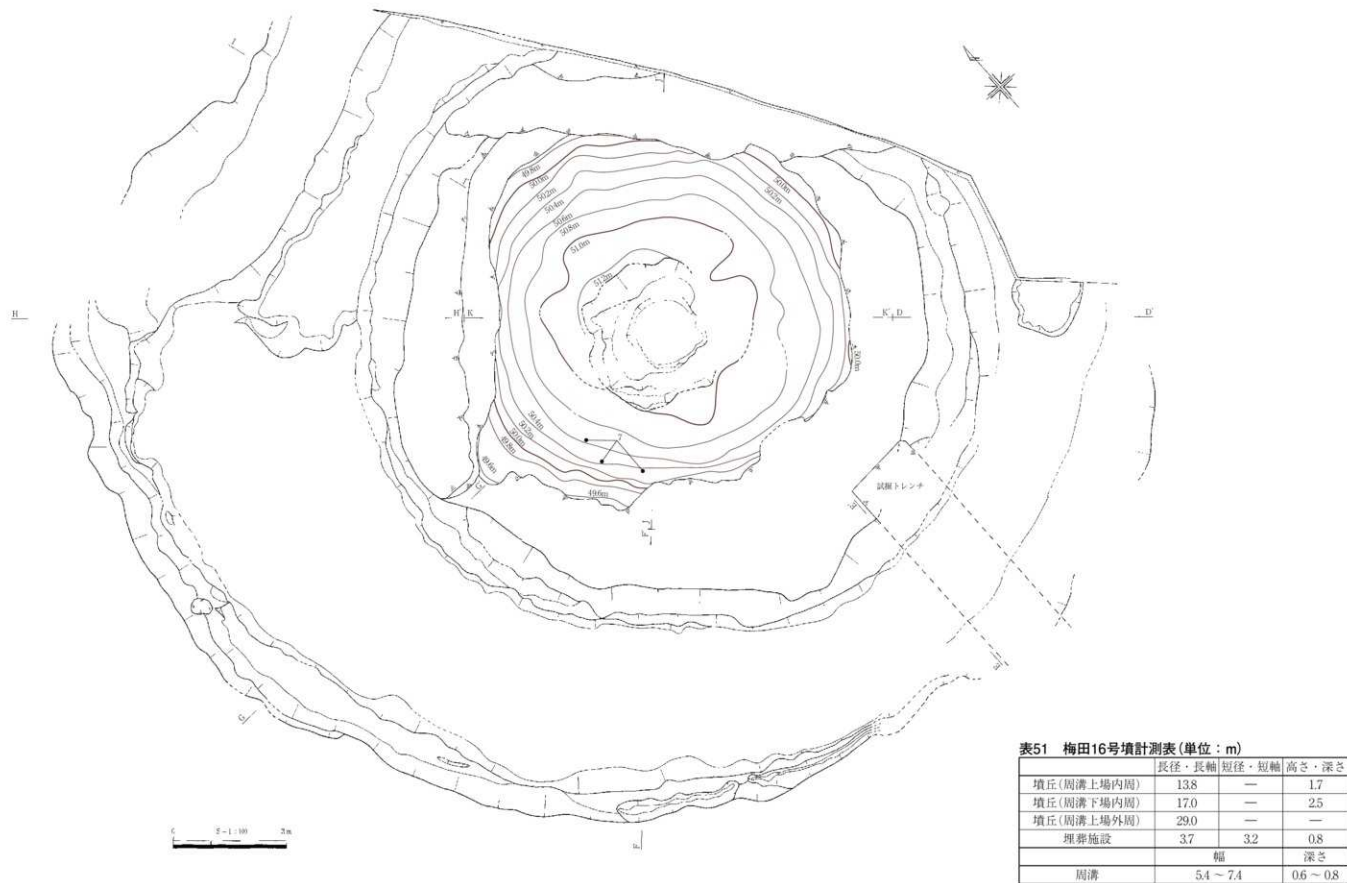
ラス状施設の有無についてははっきりしない。現況から、周溝内側で墳丘規模を復元すると径約13.8mとなる。残存する墳丘の最大高は1.7mである。

墳丘上面は樹木の根による攪乱を受けていたが、土層確認用のトレンチを随時設定し墳丘上面を精査した結果、墳丘のほぼ中央で平面形が不整な方形を呈する竪穴状の掘り込みを確認し、墓壙掘方と考えた(第136図)。しかし、墓壙の北西側から南東側へ貫く形で帯状の盗掘坑が掘られており、残存状況は不良である。墓壙の規模は、長軸約370cm、短軸約320cm、深さ82cmである。掘方の断面形は、概ね錐錐状を呈すると考えられ、埋土のうち、淡黄褐色ロームを主体とする①・⑤・⑬層が上・中層にかけてみられ、最下層には黒褐色を呈する⑬層が堆積する。埋葬形態については、15号墳でみられ



第134図 梅田16号墳調査前測量図





第135図 梅田16号墳完掘







る攪乱を著しく受けている(第137図 E-E')。北西～北側にかけて、15号墳周溝と重複する。先述のとおり、当該箇所埋土の断面観察により、15号墳周溝がある程度埋まった後、16号墳周溝が掘り込まれていたことを確認した(第138図 I-I')。周溝は、西側(第138図 G-G')で幅7.4m、検出面からの深さ57cmを測る。一方、北西、南東側ではやや深く掘り込まれ、南東側(第137図 D-D')では幅5.4m、深さ82cmとなり、周溝の西半は幅広で浅く、東半は幅がやや狭くなり、深く掘削される傾向が見える。埋土の色調は暗褐色、黒褐色を呈する。墳丘寄りの最下層(第137図㉗層、第138図㉗層など)は、ロームブロックを多く包み、墳丘流出による堆積と考えられる。上層(②・③層)からは奈良・平安時代の遺物が出土し、周溝の最終的な埋没時期はその頃と推察される。一方、周溝埋土の下層では良好な出土遺物はなかった。

墳丘盛土の堆積は、南北・東西方向に土層確認ベルトを設定し、第139図に示した。墳丘を構成する土層について、色調、土質から以下の2種類に大別した。

- a群：黒褐色土(旧地表面を形成する包含層、Ⅲ層に由来する)を主体とするもの。ロームブロック、ローム粒の包含量は基本的に少なく、しまりはあるが、粘性がやや弱い。
- b群：黄褐色・白色ロームを主体とするもの。または黒褐色土にロームブロック、ローム粒が多く混じり、暗褐色、灰褐色に変色したとみられるもの。a群と比較して、粘性が強い。

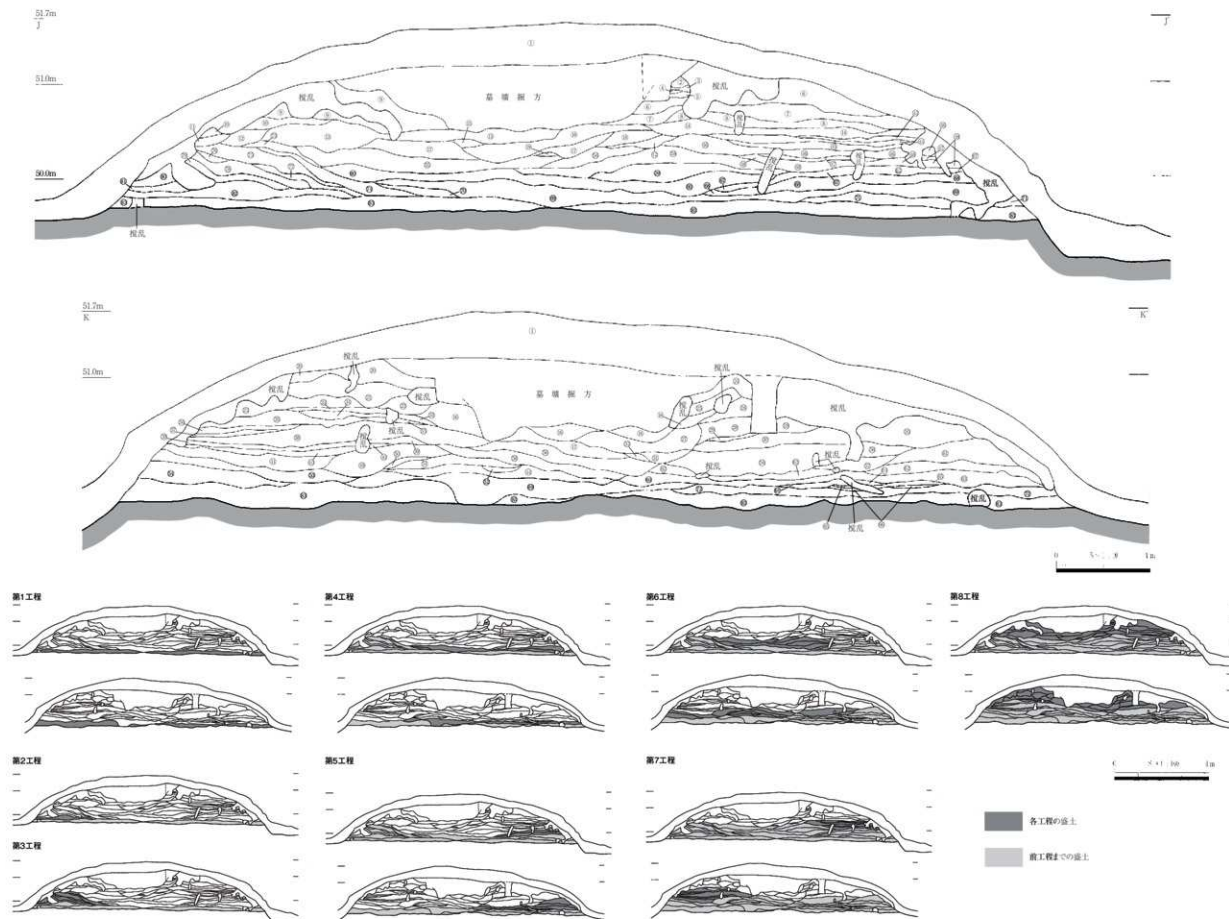
次に、墳丘の構築過程を8段階に推定した。以下、設定した段階に沿って説明する。

第1工程：最初に旧地表面上(Ⅲ層上面)にロームブロックをわずかに含む黒褐色土(㉗層)が盛られる。

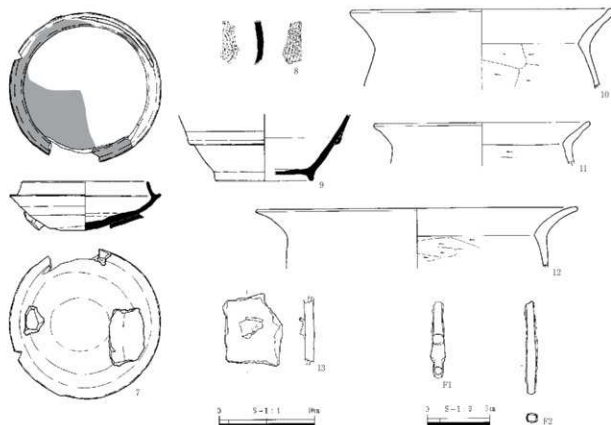
旧地表面上の凹凸を大まかに整えるためと推測する。

表52 梅田16号墳墳丘断面土層堆積一覧(第139図)

番号	層名	説明	備考	工程番号	層名	粘性	備考	工程
①	表土	経路	土壌化が進行。	8	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	7
②	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを含む。	8	灰褐色土	強	黒褐色・暗褐色土(ロームブロック)の1~2cmをわずかに含む。	7
③	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(1cm以下)を含む。	8	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を含む。	7
④	暗褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)を多含む。	7
⑤	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を含む。	8	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)をわずかに含む。	7
⑥	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	7
⑦	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	7
⑧	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)をわずかに含む。	6
⑨	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	6
⑩	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)を含む。	8	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)をわずかに含む。	6
⑪	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	6
⑫	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmをわずかに含む。	8	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~7cm)を多含む。	6
⑬	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)を多含む。	6
⑭	灰褐色土	強	黒褐色・暗褐色土(ロームブロック)の1~2cmを多含む。	8	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)を多含む。	6
⑮	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmをわずかに含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)を多含む。	6
⑯	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~5cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	6
⑰	黒褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~7cm)を多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)をわずかに含む。	4
⑱	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~5cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~7cm)を多含む。	4
⑲	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	5
⑳	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	5
㉑	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~5cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	5
㉒	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	5
㉓	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	5
㉔	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	5
㉕	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)をわずかに含む。	5
㉖	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~5cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~6cm)を多含む。	5
㉗	暗褐色土	中	ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)をわずかに含む。	4
㉘	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)をわずかに含む。	4
㉙	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~5cm)を多含む。	4
㉚	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~4cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~6cm)を多含む。	4
㉛	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)を多含む。	3
㉜	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)を多含む。	3
㉝	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)をわずかに含む。	3
㉞	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~4cm)を多含む。	3
㉟	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~3cmを多含む。	8	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	3
㊱	暗褐色土	強	黒褐色・暗褐色土(ロームブロック)の1~2cmを多含む。	7	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	3
㊲	黒褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。	7	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	3
㊳	灰褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロックの1~2cmを多含む。	7	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)を多含む。	3
㊴	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)を多含む。	7	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)を多含む。	3
㊵	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	7	暗褐色土	中	黄褐色・白色ロームブロック(約1~3cm)を多含む。	2
㊶	暗褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を含む。	7	暗褐色土	中	暗褐色土(ロームブロック)の1~5cmをわずかに含む。	1
㊷	暗褐色土	中	黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)を含む。	7				1



第139図 梅田16号墳丘断割状況



第140図 梅田16号墳出土遺物

- 第2工程：墳丘西側、墳裾寄りの㉓層。当層上面で須恵器坏身(第140図7)が3箇所に破砕した状態で検出されたため、当工程を設定した。坏身には赤色顔料が塗布され、墳丘構築に伴う儀礼的な側面を窺わせる。
- 第3工程：墳丘西側の墳裾寄りの堆積である(㉑～㉒層)。前工程後、a群とb群を互層状に盛土するが、墳丘中央方向へやや落ち込み気味となる。
- 第4工程：墳丘東側～南側で認められ、墳丘中央～墳裾寄りに向けて㉑～㉒層が盛土される。
- 第5工程：㉑～㉒層。前工程後、墳丘東側～南側の墳裾寄りにa・b群が互層状に盛土され、低い土堤状となる。一方、北側の墳裾寄りでは本工程に対応する堆積はみられない。
- 第6工程：㉑～㉒層。第5工程の高まりと西側の高まり(第3工程)の間を埋めるように、墳丘中央に盛土するが、互層状を呈さない。この工程で北側墳裾寄りにも若干土を盛る。
- 第7工程：㉑～㉒層。北側・東側の墳裾寄りでa・b群を互層状に盛土する。この工程で、雑ながら盛土の高さを概ね揃えたと考えられる。
- 第8工程：㉑～㉒層。この工程で残存する墳丘上面に至る。墳丘東側の墳裾寄りでは、前工程に引き続きa・b群が互層状となるが、他の箇所は比較的雑に盛土される。墓壇掘方は、少なくともこの工程後に掘削されている。

第140図に出土遺物を掲げた。7は先述した須恵器坏身で、墳丘盛土中からの出土である。内面と、口縁部～受部外面に赤色顔料が塗布される。受部と底部外面には他の須恵器片が付着し、焼成時に溶着したとみられる。器形や法量から、陶邑福年TK10併行期に該当すると考えられる。8は須恵器の提瓶片で、墳丘上の表土中から出土している。F1・2は墳丘上攪乱土中からの出土である。F1は鉄鎌である。長頸鎌で茎部～頸部が残存する。関の形状は台形である。F2は用途不明な棒状鉄製品。

9～13は周溝埋土上層からの出土である。9は須恵器の高台坏である。体部外面に突帯を一条貼り付け、焼成はやや不良である。出雲地域で主に出土例があり、9世紀後半～10世紀前後に比定される。10～12は土師器の甕口縁部片、13は土師器甕の胴部片か。器面に不明鉄製品片が付着している。

本古墳の築造時期については、須恵器坏身7の年代観から6世紀中葉と考えられる。(加藤)

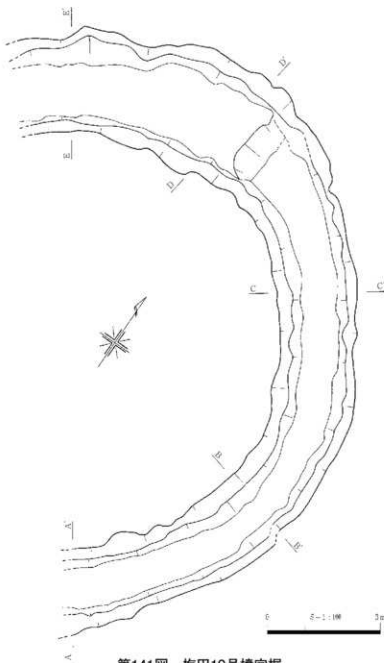
#### (4) 梅田19号墳(第141・142図、表53、PL.82)

本古墳は調査区北西隅、C・D 8グリッドに位置する。小規模な谷地形の谷頭にあたる平坦面に占地し、北東側約11.5mには14号墳、東側約5.4mには15号墳が隣接する。現況は畑地として開削され、平滑な地形をなすことから、調査前には古墳の存在は確認できなかった。墳丘盛土は残存せず、IV層直上において周溝のみを検出した。南西側は調査区外であるため、全体の1/2程度の検出にとどまった。周溝の平面形態から円墳と想定され、周溝内側で計測した墳丘規模は約11.0m(北西-南東方向)

である。周溝の平面形態・墳丘規模ともに、15・16号墳と近似している。検出を行った範囲においては、埋葬施設の痕跡は認められない。検出面の標高は概ね49.6～50.0mである。

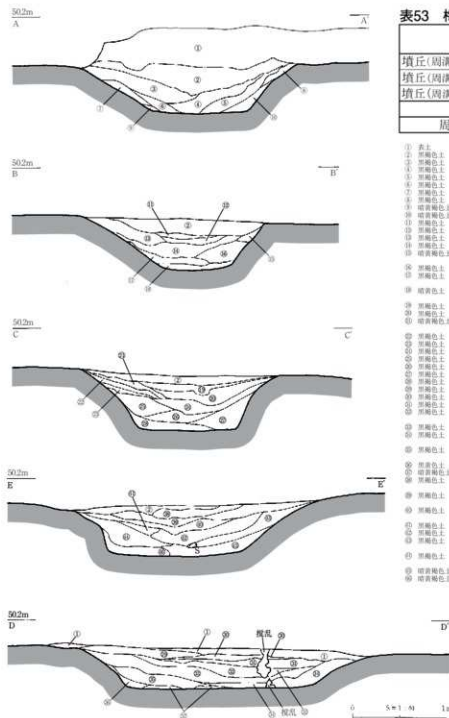
周溝の規模は、検出面での幅が1.8～3.3mであり、北側が最も広い。検出面からの深さは40～60cmである。D-D'ラインの東側約50cmの位置では、周溝底面に高低差が認められ、東側が約15cm深く掘り込まれる。周溝底面の標高は北側が最も高く約49.5mを測り、南東側が約49.2m、北西側が約49.4mを測る。断面形はU字状を呈し、上部はやや外反する。埋土は上～下層では黒褐色土が主体となすもの、最下層では暗黄褐色土・暗黄色土などが堆積する。土層断面の観察から、まず墳丘盛土が崩落し堆積した後、墳丘側もしくは周溝外側からの自然堆積がくり返されたことが窺える。埋土中位にはシルトや小礫などが堆積することから、埋没課程において一時的に滞水した時期があったと思われる。

遺物は須恵器などが数点出土したものの小片のため、図化できなかった。また埋土下層より拳～人頭大の自然礫



第141図 梅田19号墳完掘





第142図 梅田19号墳周溝土層断面図

が10数点出土した。これらの自然礫は底面直上で出土したものは無く、出土点数も少ないことから、本古墳の葺石として利用された可能性は低いと思われる。

本古墳は時期を特定できる遺物の出土がみられず築造時期を判断するのは困難であるが、梅田古墳群内において築造年代が特定できる梅田12・15・16号墳から判断し、6～7世紀代のものである可能性は高い。

(森本)

## 【参考文献】

湯村 功ほか2008「梅田葦峯遺跡Ⅳ」鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書22 鳥取県埋蔵文化財センター

表53 梅田19号墳計測表(単位:m)

	長径・ 長軸	短径・ 短軸	高さ
墳丘(周溝上場内周)	11.0	—	—
墳丘(周溝下場内周)	11.9	—	—
墳丘(周溝上場外周)	15.8	—	—
	幅		深さ
周溝	1.8～3.3	0.4～0.6	

① 表土	粘性 細砂
② 黒褐色土	強 礫
③ 黒褐色土	中 真鍮色ロームブロック(約1～2cm)を多く含む。
④ 黒褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
⑤ 黒褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
⑥ 黒褐色土	中 真鍮色ロームブロック(約1～2.5cm)を含む。
⑦ 黒褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
⑧ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
⑨ 暗栗褐色土	強 灰白色シルトを多く含む。わずかに含む。
⑩ 黒褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
⑪ 黒褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
⑫ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
⑬ 暗栗褐色土	強 黒色土層を連続的に含む。真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
⑭ 黒褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
⑮ 黒褐色土	中 黒色のシルトブロック(約1～4cm)を多く含む。⑫層より色調がやや明るい。
⑯ 暗栗褐色土	中 真鍮色ロームブロック(約1～1.5cm)を多く含む。黒色土層を連続的に含む。
⑰ 暗栗褐色土	強 暗栗褐色土を多く含む。
⑱ 暗栗褐色土	強 真鍮色ロームブロック(約1cm)を含む。色調がやや明るい。
⑲ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
⑳ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
㉑ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
㉒ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。
㉓ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
㉔ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
㉕ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
㉖ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
㉗ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。黒褐色土層を多く含む。
㉘ 暗栗褐色土	中 真鍮色ロームブロック(約1～1.5cm)を多く含む。色調がやや明るい。
㉙ 黒褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㉚ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㉛ 暗栗褐色土	強 真鍮色ローム粒(1cm以下)。灰白色シルトを含む。色調がやや明るい。
㉜ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)。灰白色シルト。黒褐色土層を多く含む。色調がやや明るい。
㉝ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)。灰白色シルト。黒褐色土層を多く含む。
㉞ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
㉟ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。
㊱ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を多く含む。色調がやや明るい。
㊲ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊳ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊴ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊵ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊶ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊷ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊸ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊹ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊺ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊻ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊼ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊽ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊾ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。
㊿ 暗栗褐色土	中 真鍮色ローム粒(1cm以下)を含む。



写真4 梅田19号墳周溝内礫出土状況(北東から)

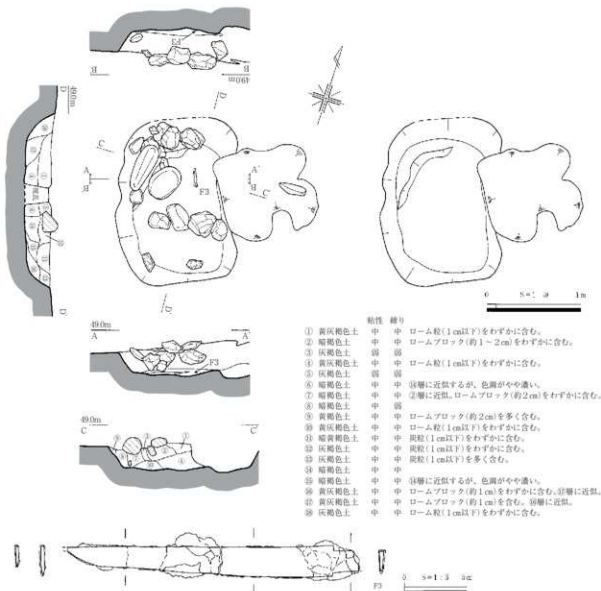
## 第4節 古墳以外の調査成果

## 1 配石墓

## SX1 (第143図、表60、PL.83・87)

調査地南隣の谷へと降る急峻な斜面の直前、O4グリッドの緩斜面上に位置し、標高は約48.8mである。表土下のIV層上面で検出した。平面形は不整な隅丸長方形を呈する土坑で、長軸約180cm、短軸約120cm、検出面からの深さは最大で28cmを測る。土坑内では、大小の礫が「コ」字状に配置された状況で検出された。ただ、土坑の北東～東側は後世の植林による攪乱を著しく受け、土坑に伴っていたとみられる礫をいくつか巻き上げているため、配石は全周していた可能性がある。こうした配石が埋葬に関連する可能性を考え、本遺構を配石墓として報告することとした。

墓塚の北～西側では、壁面沿いに礫が配されるのに対し、墓塚の西側長辺の途中で礫群の並びは東方向へ屈曲し、壁面に沿っていない。前述のとおり、攪乱のため墓塚東側の配石の状況は不明だが、配石が全周していたと仮定すると、礫群に囲繞された空間は約60cm四方と想定され、墓塚の規模と比



第143図 SX1および出土遺物

較して狭小となる。

配石の手法は、箇所によって異なる。墓壇掘方が二段掘り状となる北西～西壁際では、礫をほぼ墓壇底面から複数段積む。ただ、各礫間には間隙が目立ち、粗雑な印象を受ける。また、北西列では角礫を用いるのに対し、西列では円礫を主に配しており、傾向が異なる。一方、配石が墓壇壁面に沿っていない南東列では、埋土上層に角礫を据えるのみで、簡素な配し方となっている。このように、礫を配して囲繞する意識は窺えるものの、手法はかなり粗雑である。

墓壇掘方埋土は、黄灰褐色、灰褐色、暗褐色を呈する。⑦～⑱層は、礫群を包括し壁面寄りに堆積している。①～⑥層は礫群に囲繞された空間内の堆積と想定するが、棺等の埋葬形態を示す痕跡はみられなかった。

礫群の内側のほぼ底面から、鉄製小刀F3を検出した。ほぼ完存しており、副葬品と考えられる。遺物はそのほかに出土していないため、帰属する時期は不明であるが、調査地内における出土遺物の様相から勘案すると、奈良～平安時代、もしくは中世の可能性が考えられる。(加藤)

## 2 土坑

### SK 1 (第144図、PL.84)

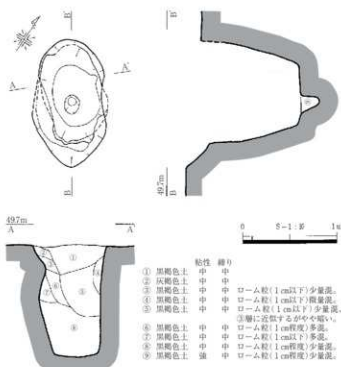
D 8 グリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出した。SD 5 と重複し、北側の上部は部分的に破壊されている。検出面の平面形は楕円形を呈し、北東側の壁面は部分的にオーバーハングする。検出面での規模は長軸約135cm、短軸約75cm、検出面からの深さは約168cmを測る。底面の平面形は楕円形を呈し、底面の規模は長軸約65cm、短軸約48cmを測る。埋土は9層に分層でき、黒褐色土を主体となす。底面直上には、平面楕円形の小ピットを1基検出した。長軸約20cm、短軸約16cm、底面からの深さは約19cmを測る。本遺構の平面形態から判断し、落とし穴と推察される。遺物は出土していない。

(森本)

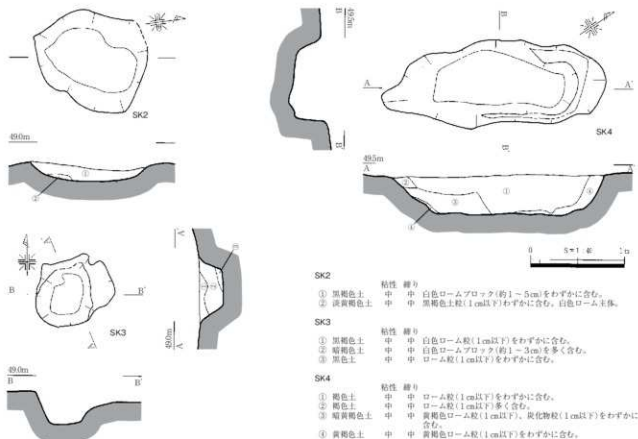
### SK 2 (第145図、PL.84)

E 7 グリッドに位置する。梅田16号墳周溝下、ローム直上において検出した。南側にはSK 3 が近接する。検出面の平面形は不整な楕円形を呈す。検出面での規模は長軸約123cm、短軸約96cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約24cmを測る。底面の平面形は不整な楕円形を呈し、底面の規模は長軸約98cm、短軸約47cmを測る。埋土は2層に分層でき、黒褐色土を主体となす。遺物は出土していない。

本遺構は、梅田16号墳との重複関係により6世紀中葉以前のもと考えられる。(森本)



第144図 SK 1



第145図 SK2~4

**SK3 (第145図、PL.84)**

E7グリッドに位置する。梅田16号墳周溝下、ローム直上において検出した。北側にはSK2が近接する。検出面の平面形は不整な円形を呈す。検出面での規模は長軸約82cm、短軸約70cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。底面の平面形は不整な楕円形を呈し、底面の規模は長軸約43cm、短軸約31cmを測る。埋土は3層に分層でき、黒色土が堆積後、暗褐色土、黒褐色土の順に堆積する。遺物は出土していない。

本遺構は、梅田16号墳との重複関係により6世紀中葉以前のもと考えられる。(森本)

**SK4 (第145図)**

N3グリッドに位置する。表土除去後、IV層直上において検出した。検出面の平面形は不整な長方形を呈す。検出面での規模は長軸約232cm、短軸約87cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、北東側には僅かにテラスをもつ。検出面からの深さは約44cmを測る。底面の平面形は不整な長方形を呈し、底面の規模は長軸約138cm、短軸約55cmを測る。埋土は4層に分層でき、黄褐色系の埋土(③・④層)が壁際から底面にかけて堆積した後、褐色系の埋土(①・②層)が堆積する。①層の堆積は底面にまでおよんでいる。遺物は出土していない。(森本)

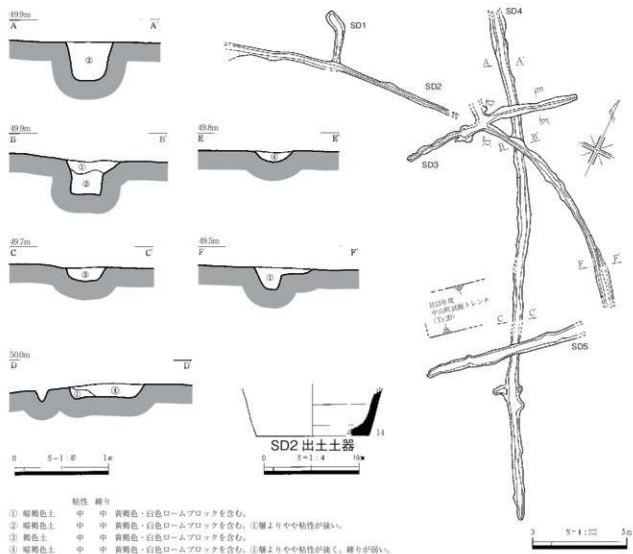
## 3 溝

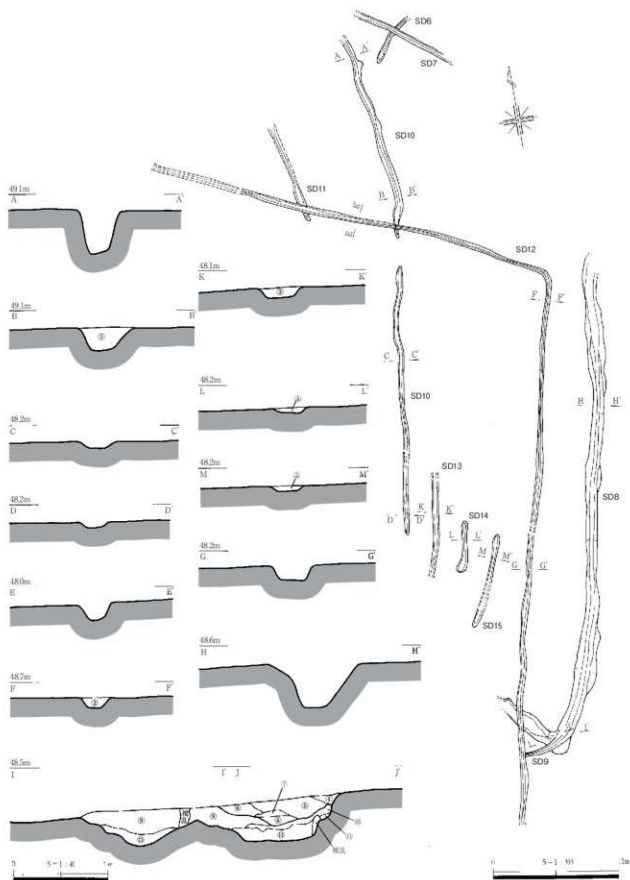
調査区内では、16条の溝が認められた。SD16はSX1以前であり、SD1～15と異なる時期と考えられることから個別に扱うが、他の溝については後述するように近年の耕作に伴う可能性が高い。しかし、近年の溝と断定することが出来なかったため、触れることとする。なお、SD1～15は、16号墳を境に南北に分けられることから、便宜的に分けて触れる。

## SD1～5 (第146図、表54・58、PL.84・87)

SD1～5は、標高49～50mのC・D7、B・C8、B・C9グリッドにかけての平坦地に位置する。Ⅲ・Ⅳ層上面で検出され、SD1・4は南東-北西方向、SD2は東西方向、SD3・5は南西-北東方向を向く。これらの溝には切り合いが認められ、SD1・4→SD2、SD2→SD3、SD4→SD5の関係にある。またSD1と4、SD3と5は走向を同じくすることから関連性が窺え、切り合いに見られる先後関係とも矛盾はない。

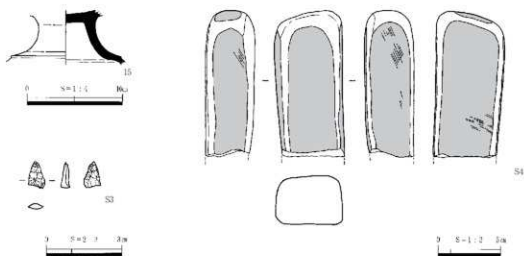
本遺構の性格であるが、SD2・4は、平成13年度の試掘調査(西尾2002)では道路の側溝としての機能が考えられている。しかし今回の調査により、これらの溝は平行せず、切り合い関係も認められた





- |         |   |   |                  |           |   |   |  |
|---------|---|---|------------------|-----------|---|---|--|
| ① 灰褐色土  | 弱 | 粘 | 粘り               | ⑦ 暗褐色土    | 中 | 粘 | 粘り                                       |
| ② 暗褐色土  | 中 | 粘 |                  | ⑧ 暗褐色シルト  | 中 | 粘 | SD9埋土。                                   |
| ③ 暗褐色土  | 強 | 粘 | 褐色土ブロックを多く含む。    | ⑨ 暗褐色土    | 中 | 粘 | SD9埋土。                                   |
| ④ におい相土 | 中 | 粘 | SD9埋土。           | ⑩ 灰褐色土    | 中 | 粘 | 黄褐色、白色ロームブロック(約1~1.5cm)・粒(1cm以下)をわずかに含む。 |
| ⑤ 灰褐色土  | 中 | 粘 | SD9埋土。           | ⑪ におい黄褐色土 | 中 | 粘 | 黄褐色・白色ローム粒(1cm以下)をわずかに含む。                |
| ⑥ 灰褐色土  | 中 | 粘 | ⑬に類似するが、やや色調明るい。 | ⑫ 黄褐色土    | 強 | 粘 | 黄褐色・白色ロームブロック(約1~2cm)・粒(1cm以下)を含む。       |

第147図 SD6~15



第148図 SD8出土遺物

ことから、道路側溝としての機能は考えられない。またSD2からは、奈良～平安時代にかけての須恵器壺片が出土しているが、本遺構南側に見られる近年の耕作痕と走向を同じくすることから、近年の可能性が高いと思われる。(前田)

#### SD6～15(第147・148図、表54・58・59、PL.87)

SD6～15は、調査区南側の標高約48～49mの緩斜面に位置し、H4～L4、F5～L5、G6～H6グリッドにかけて認められた。検出層位はⅢ・Ⅳ層上面である。これらの溝は、SD6を除き、大きくは南北、北西～南東を向く。また、南北方向に主軸をとるSD8やSD12など、途中屈曲し北西～南東を向くものもある。

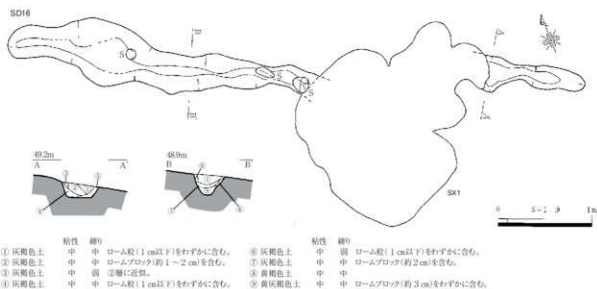
これらの溝は、検出時その走向を同じくすることから関連性が考えられたが、埋土の切り合いからは、SD6→SD7、SD8→SD9・12、SD9→SD12、SD10・11→SD12の関係が認められ、走向を同じくするものにおいても先後関係があることが明らかとなった。しかし、検出面の状況からではあるが、これらの溝は、SD8の一部を掘り直したSD9がSD12の西側では認められないことや、南北に走向するSD8と12は屈曲した方向も北西～南東とその向きを近くすること、北西～南東方向に走向するSD12を境にSD10・11も走向する向きを変えるなど、走向を同じくしないものについても関連したものであった可能性は高く、切り合い関係は認められるが近接した時期のものであった可能性が高い。

上記のことからSD7～15は近い時期のものであったと考えられ、第123図に見られるように表土から掘り込まれた溝もSD8を境に東側には認めなくなる状況や、近年本遺跡地内は耕作地として利用されていたことなどを勘案すると、本遺構は現代の耕作に伴った溝であったものかもしれない。また、出土遺物にはSD8から8世紀後半～9世紀前半ころのものと考えられる須恵器高坏の脚部破片が認められるが上述のとおり、本遺構の年代を示さないものと思われる。

SD6は、埋土を見た場合、SD10や近年の攪乱溝と類似することから、他の溝同様、耕作に伴ったものの可能性がある。(前田)

表54 SD1～15計測表

No	長さ(m)	最大幅(cm)	深さ(cm)
SD1	4.0	80	7
SD2	23.0	60	18
SD3	9.3	60	8
SD4	27.0	70	50
SD5	7.8	70	8
SD6	4.5	45	7
SD7	8.1	45	8
SD8	45.6	150	60
SD9	4.5	120	30
SD10	40.0	60	45
SD11	7.8	66	32
SD12	68.7	60	15
SD13	6.6	51	7
SD14	3.9	45	6
SD15	7.5	60	16



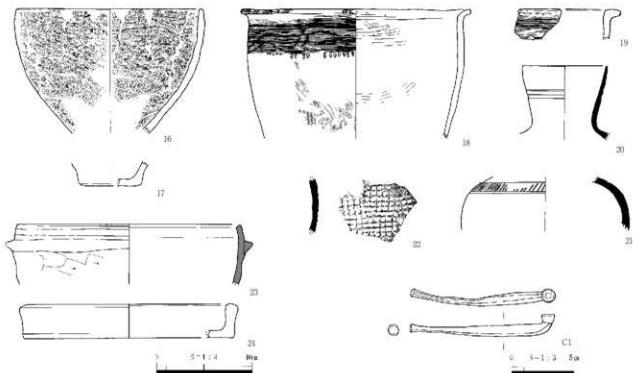
第149図 SD16

SD16(第149図、PL.84)

O4グリッド、標高約48.5～49mの緩斜面に位置する。南東～北西方向へ直線的に走向する溝で、検出した長さは約6.1mである。幅は16～70cm、検出面からの深さは最大で25cmを測る。南東寄りでは配石墓SX1と重複している。両遺構の先後関係については、埋土の重複状況を把握できなかったため明確ではないが、本遺構によってSX1の配石が動かされた痕跡が現況では窺えないことから、SX1により掘削されたと判断した。埋土は灰褐色、黄褐色を呈する。埋土中には小礫が散見され、SX1に伴っていた可能性があるが、一帯で為された後世の植林により攪乱を受けた際に混入したと考えられる。遺物は出土しておらず、本遺構の帰属する時期は不明である。(加藤)

【参考文献】

西尾秀道編2002『町内遺跡発掘調査報告書』中山町教育委員会



第150図 遺構外出土遺物

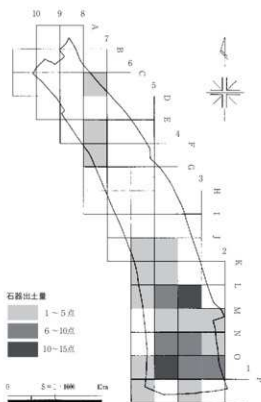


## 第5節 遺構外出土遺物

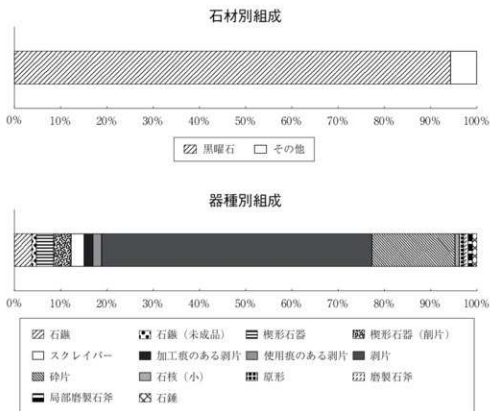
本節では、調査地内からの出土遺物のうち、遺構に伴わないものを取り扱う。多くが表土、及び攪乱土中からの出土である。第150図に土器・金属器、第153図に石器を掲げた。

### (1) 土器・金属器(第150図、表58・60、PL.88)

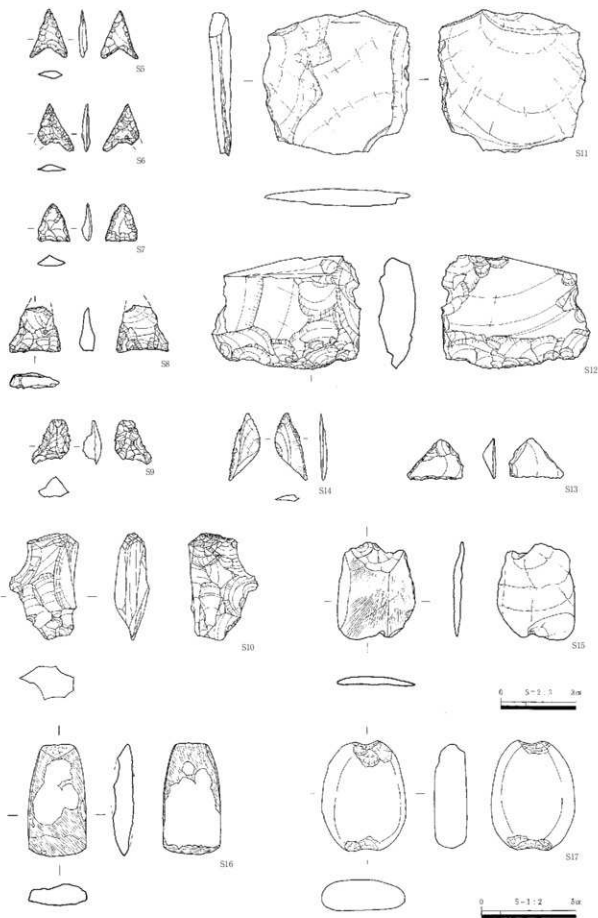
16・17は縄文土器の粗製深鉢である。16は口縁部～胴部下半までが残存する。胴部下半～上半は緩やかに内湾しながら外傾し、口縁部では直立気味となる。内外面には条痕が残る。17は底部資料で、平底状となる。胎土が16と類似し、同一個体の可能性がある。これらは縄文後期に帰属する可能性が考えられる。18・19は弥生土器の甕である。口縁部は逆「L」字状に外反し、端部に刻目を施す。頸部には多条の櫛描沈線文が入る。Ⅱ-2様式に該当する。20・21は須恵器の甕である。20は頸部～口縁部で、長頸となる。21は胴部上半が残存する。22・23は中世に属する遺物で、22は瓦質の羽釜である。23は須恵器甕の胴部片で、勝間田系の



第151図 グリッド別石器出土量概念図



第152図 石材および器種別組成図



第153図 遺構外出土石器

表55 石器石材別組成表 (単位:点)

器種 石材	器種											計			
	石鏃	石鏃未製品	楔形石器	楔形石器(削片)	スクレイパー	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	石核(小)	原形		磨製石斧	局部磨製石斧	石鏟
黒曜石	3	1	4	4	2	2	2	61	19	1	1				100
頁岩												1	1		2
サヌカイト	1				1										2
安山岩								1						1	2
計	4	1	4	4	3	2	2	62	19	1	1	1	1	1	106

可能性がある。24・C1は近世以降の遺物である。24は土師質土器の焙烙。C1は銅製の煙管で、雁首と吸口が一体となるタイプである。(加藤)

## (2) 石器(第151～153図、表55・59、PL.87)

石器は、包含層、および表土・攪乱土中から106点出土している。第152図に石材・器種別の組成を示した。石材は黒曜石が主体で100点(94%)を占める。その他の石材として、頁岩、サヌカイト、安山岩が各2点みられる。器種の内訳は、剥片が62点(58%)と最も多く出土し、砕片が19点(18%)で続く。一方で石核、原形(ブランク)は2点に留まる。石器器種では、石鏃が4点、楔形石器が4点、スクレイパーが3点と、少数ながら出土している。その他では、磨製石斧、局部磨製石斧、石鏟がある。石器の形態・石材構成から考えると、縄文時代に帰属するものが主体となると考えられる。

次に石器分布の概要を把握するため、グリッド毎(1グリッド:10×10m)の石器出土量を算出し、分布模式図として図示した(第151図)。これを見ると、調査地南半に石器分布が集中していることが分かる。なかでもL3、O4グリッドが14点と最多数を示し、これらを中心に周辺のグリッドで一定数の出土が認められる。調査地南西・南隣の谷を臨む緩斜面上に分布の中心があるといえよう。石核・素材の出土が少ないものの、剥片・砕片が比較的多数みられることから、当地周辺で小規模ながら石器製作が行われていた可能性が考えられる。

上記の出土石器のうち、13点を図示した(第153図)。S5～9は石鏃である。S5は安山岩製、S6～9は黒曜石製である。S5・6が凹基式、S7・8が平基式。S8は楔形石器を転用したものと思われる。S9は石鏃(凹器式)の未成品。S10は楔形石器で、黒曜石製。両極打法による剥離痕を有する。S11～13はスクレイパーで、石材はS11がサヌカイト、S12・13が黒曜石である。S14は加工痕を有する剥片で、黒曜石製。S15は安山岩製の剥片である。この剥片は、外面にみられる研磨痕から磨製石斧と考えられ、石斧を再加工する際に生じたものと考えられる。S16は小型の磨製石斧、頁岩製である。S17は安山岩製の打欠石鏟である。(加藤)

## 第6節 梅田六ツ塚遺跡の総括

### 1 梅田古墳群について

梅田六ツ塚遺跡は、その調査地内に梅田古墳群中の梅田14～16号墳、19号墳の4基の古墳が含まれることが明らかとなった。しかし、14号墳は周溝の一部がわずかに調査地内に含まれる程度であり、19号墳も墳丘部分は削平され、周溝のみの調査となった。このことから、ここでは一部に近年の擾乱が及ぶものの、墳丘や埋葬施設等が残存する15・16号墳の調査成果を中心に述べたい。さらに15・16号墳は出土物から、15号墳が6世紀前葉(陶邑編年MT15併行)、16号墳が6世紀中葉(陶邑編年TK10併行)と築造時期が明らかとなったが、平成13年度に中山町教育委員会で調査された梅田12号墳(西尾ほか2002)が6世紀後葉～7世紀初頭(陶邑編年TK43～209併行)であることから、梅田12号墳も含め、古墳時代後期(6世紀)の梅田古墳群、ならびに周辺地域の古墳群についても言及したい。

#### (1) 墳丘構築方法について

古墳の墳丘構築方法については、古墳時代前期には弥生時代の方形周溝墓、墳丘墓以来の墳丘中央部に小丘を築き、この小丘に盛土を肉付けしていく東日本の工法と、墳丘外縁に土堤を築いた後、その内側に土を充填する西日本の工法などの地域差が認められること、中期以降、西日本の工法が全国的に普及することなど、その構築方法に地域差や変遷があることが指摘されている(青木2003)。

梅田六ツ塚遺跡の調査の結果、6世紀前葉の梅田15号墳においては、墳丘が比較的残存する南北断割り断面から、4つの構築手順をとることが考えられる。

第1工程……旧表土上面に盛土によって整地を行う。断面形状はやや凹状。

第2工程……墳丘の縁辺部に土堤を築く。

第3工程……第2工程でできた土堤内側の凹地を埋め、土堤上面ほどの高さで平坦面を構築する。

第4工程……第3工程でできた平坦面の上に互層積みによる盛土で墳丘を構築する。

このように15号墳に見られる構築方法は、先に触れた西日本の工法を用いたものである。なお、後期群集墳においては、土堤断面が不等辺三角形を呈するようになることも指摘されている(青木2003)。15号墳も土堤部分周辺に擾乱を受けることから詳らかでないが、同様であった可能性もある。

続く6世紀中葉の16号墳においては、第3節で墳丘構築に8つの工程を想定しているが、大きくは以下の工程に整理される。

第1工程……旧表土上面に盛土によって整地を行う。

第2工程……墳丘の西側縁辺部に土堤状の高まりを築く。

第3工程……第2工程でできた土堤の基部付近から、東、及び南側に盛土が行われる。

第4工程……墳丘中央付近を中心に盛土が行われる。

第5工程……第2工程でできた土堤上面付近に高さが揃うように、東、及び北側に盛土が行われるが、きれいな平坦面は作られない。

第6工程……第5工程まででできた墳丘の上位に盛土を行う。互層積みが見られる部分もあるが、雑な積み方となる。

16号墳の墳丘構築は、第1工程、第2工程で一部ではあるが土堤を作ること、第5工程で平坦面を作ることなど、15号墳と共通する点が見られる。しかし、第3～5工程に見られるような盛土の方法は、15号墳のそれと比べ、企画性は認められず、雑の観を呈する。なお、16号墳では第2工程にあた

る土堤中から、破砕された赤彩須恵器が出土した。近年、古墳の構築においては、構築過程のある段階で儀礼行為を行う場合があったことが明らかとなってきた(土生田1998)が、土堤構築途中の◎層上面で赤彩須恵器を破砕する本例も同様のものであったと考えられる<sup>(1)</sup>。このことから考えた場合、第2工程を儀礼行為が行われる◎層前後で分けることも可能である。

それでは6世紀後葉～7世紀初頭に位置する梅田12号墳では、どのような構築方法が認められるのであろうか。

梅田12号墳は近年の耕作や盗掘等により、墳丘の東西、及び北側を掘削された円墳である。残存する墳丘規模は、長径8.5m、高さ1.2mを測る。周溝から推定される15～16mの規模に比べ、変更が甚だしいが、墳丘断割りの状況から墳丘構築方法は次のように判断される。

第1工程……北側に向かい傾斜する旧地形を平坦にするように、墳丘北側に盛土が行われる。さらに墳丘中央、及び南側に薄い盛土が行われる。

第2工程……第1工程でできた平坦面上部に厚く盛土を行う。

上記の構築方法を梅田12号墳は採ったと思われるが、先に触れた15・16号墳に見られる土堤の構築や互層積みなどの構築方法は見受けられない。

以上、梅田15・16、梅田12号墳の3古墳の墳丘構築方法を概観した。検討を行うには少ない数ではあるが、梅田古墳群においては築造時期により、墳丘構築方法に違いが認められる可能性が指摘できる。すなわち、6世紀前葉の15号墳においては整地→土堤構築→平坦面構築→墳丘上位の構築といった企画性の強い構築方法が採られるのに対し、6世紀中葉の16号墳では、15号墳にみた構築過程の随所で雑の観をみせる。さらに6世紀後葉～7世紀初頭の梅田12号墳においては、大きく2層による墳丘の構築といった、15・16号墳に見られる構築手順や、互層積みなどの盛土方法は認められなくなるのである。

## (2) 梅田古墳群の埋葬施設構築について

次に梅田古墳群に見られる埋葬施設について触れたい。既述のとおり、梅田古墳群は確認されるものはいずれも、箱式石棺や木棺といった堅穴式の埋葬施設であり、その構築には墓壇を伴った<sup>(2)</sup>。墓壇の構築については、和田晴吾氏により、掘込墓壇と構築墓壇に分類されたうえ、掘込墓壇はさらに、墳丘盛土終了後に掘られるa類、盛土途中から掘られるb類、盛土前に掘られるc類の3つに細分される(和田1989)。これによれば、15号墳は攪乱によって墳丘盛土のどの段階で埋葬施設が構築されたか不明なことからaもしくはb類、16号墳はa類に分けられ、同古墳群中の梅田12号墳についても、16号墳同様、a類に分けられる。ここでさらにそれぞれの埋葬施設の床面位置に着目すると、15号墳は埋葬施設床面を古墳構築の基盤層にあたる旧表土上面付近に構築されているのに対し、16号墳、及び梅田12号墳は墳丘盛土中にその床面を置く。このことを整理すると判明する梅田古墳群の埋葬施設に関しては表56のようになる。

表56 梅田古墳群に見られる埋葬施設

古墳名	埋葬施設	墓壇分類	埋葬施設の床面位置	時期	文献
梅田15号墳	箱式石棺	aもしくはb類	基盤層上面付近	6世紀前葉	本書
梅田16号墳	木棺?	a類	墳丘盛土中	6世紀中葉	本書
梅田12号墳	木棺?	a類	墳丘盛土中	6世紀後葉～7世紀初頭	西尾ほか2002

ここで梅田古墳群が造営された古墳時代後期における東伯耆の埋葬施設の様相を概観したうえ(牧本1996)、梅田古墳群ならびに周辺の古墳群について触れたい。

古墳時代後期、東伯耆では箱式石棺などの従来の堅穴系の埋葬施設に加え、横穴式石室が構築される。6世紀中葉ころの倉吉市大宮古墳や北栄町上種東3号墳などが導入期のものであったと考えられるが、前者は穹窿天井をもつ石室が構築されることから中部九州の、後者は堅穴系横口式石室であることから北部九州の影響が考えられている。そして6世紀後葉以降においては、東伯耆の広い範囲で先に見た中部九州系の石室の影響を残す石室(扁平板石組石室)が認められるようになるが、小鴨川流域、加勢蛇川流域など中部九州系、北部九州系を独自に変容させる地域もみられる状況である。

さて、このような状況を呈する東伯耆において梅田古墳群が営まれる東伯耆西端<sup>(3)</sup>は、横穴式石室の受容があまり認められない地域である。横穴式石室の導入期、周辺では洗川水系の三保6号墳に堅穴系横口式石室が認められるものの後には続かず<sup>(4)</sup>、その受容は7世紀に下る。先にみた6世紀後葉に水系によって石室形態が変容することからすれば、後期の東伯耆において埋葬施設形態の受容等は、水系単位の狭小な範囲で選択があったと考えられ、梅田古墳群周辺は古墳時代後期の埋葬施設として、堅穴系の埋葬施設を採用し続ける地域であった。管見によれば、該期の古墳でその内容、時期などが明らかなのは表57のとおりである。

表57 周辺古墳群の埋葬施設状況 (※3は東伯耆西端が西端、4は埋葬施設が横穴系)

古墳名	所在地	埋葬施設	墓塚分類	埋葬施設の床面位置	時期	文献
御崎7号墳	大山町中山大字御崎	箱式石棺3基	c類	基盤層下位	6世紀前葉	西尾1999
御崎24号墳	大山町中山大字御崎	箱式石棺?	a類	墳丘盛土中	6世紀中葉	西尾1999
別所15号墳	琴浦町赤碕大字別所	木棺?	(c類)	基盤層下位	6世紀中葉	大谷1995
別所16号墳	琴浦町赤碕大字別所	不明	(c類)	基盤層下位	6世紀前葉～中葉	大谷1995
別所19号墳	琴浦町赤碕大字別所	箱式石棺	(c類)	基盤層下位	6世紀前葉～中葉	大谷1995
福留2号墳	琴浦町赤碕大字赤碕	不明	(aもしくはb類)	(墳丘盛土中)	6世紀中葉	門脇2001
福留1号墳	琴浦町赤碕大字赤碕	不明	(aもしくはb類)	(墳丘盛土中)	6世紀後半	門脇2001

この梅田古墳群周辺の後期古墳の様相と、先に見た梅田古墳群の様相を合わせ考えると、本地域では6世紀を通して埋葬施設の構築段階、ならびにその位置は、c類・墳丘下からa類・墳丘中へと変化していったことが予想される。それでは、この変化の要因としてどのようなことが考えられるのだろうか。鳥取県の同棺複数埋葬を検討した岡野氏によると、後期に見られる同棺複数埋葬には、長期にわたって複数の遺体が埋葬された大山町向原6号墳(水野1982)や米子市日下12号墳(藤原1992)など、堅穴系埋葬施設においても追葬と考えられるものが認められるようである(岡野2000)。本来、追葬は横穴式石室等の埋葬施設閉閉が容易なものに伴うものであるが、先に挙げた追葬例を考えるならば、梅田古墳群に見られる埋葬施設の位置の変化もこの追葬行為に起因する現象であった可能性がある。そして、その変化の時期も6世紀中頃と東伯耆において横穴式石室が導入される時期にあたることはその可能性を高めるものかもしれない。(野口)

## 【註】

- (1) 鳥取県内では本例のほか、墳丘盛土中から須恵器12個がまとまって出土した6世紀後半の日野郡江府町佐川5号墳(中原1986)、周溝内で焼土面が検出される6世紀後半の東伯郡琴浦町福留1号墳(門脇2001)など、古墳構築途中、もしくは終了後の儀礼行為が確認されている。
- (2) 梅田15号墳は、埋葬施設周辺に攪乱を受けるため、墓壇掘込面など明確に検出はできなかったが、箱式石棺床面の整地前の状況として、凹凸が見受けられることから墓壇を伴ったものと判断する。
- (3) 現在の行政区画では、梅田古墳群がまたがる大山町中山は西伯郡に区分されるが、近世以前、中山東端は東伯郡に区分されていたことから、ここでは中山東端の古墳群も合わせ検討する。
- (4) 6世紀中葉の琴浦町赤碕の別所14号墳は、石材の遺存状況から横穴式石室を想定している(赤碕町教育委員会1991)が、遺存する石材からは堅穴系埋葬施設に伴う石棺石材の可能性も高いと判断される。このことから別所14号墳は、本地域における横穴式石室の導入についてなど別所古墳群の埋葬施設を検討する際に貴重な資料となると思われるが、今回の検討では確かな判断ができないことから除外する。

## 【参考文献】

- 青木 敬2003「古墳築造の研究－墳丘から見た古墳の地域性－」六一書房
- 赤碕町教育委員会1991「別所第3遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
- 大谷浩史編1995「別所古墳群・別所女夫岩峯遺跡発掘調査報告書(別所15～21・5号墳)」赤碕町教育委員会
- 岡野雅則2000「鳥取県内における同棺複数埋葬について」『鳥古墳群 米里三ノ岩遺跡 北尾釜谷遺跡(北尾古墳群)』(財)鳥取県教育文化財団
- 門脇豊文編2001「福留遺跡発掘調査報告書」赤碕町教育委員会
- 中原 齊編1986「佐川遺跡群」(財)鳥取県教育文化財団
- 西尾秀道編1999「御崎古墳群Ⅰ」中山町教育委員会
- 西尾秀道ほか2002「栄田古墳群」中山町教育委員会
- 土生田純之1998「古墳構築過程における儀礼－墳丘を中心として－」『黄泉国の成立』学生社
- 藤原裕子編1992「日下古墳群発掘調査報告書」米子市教育委員会 日下古墳群調査団
- 牧本哲雄1996「伯耆東部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室－地域性と編年の再検討－』第24回山陰考古学研究会集
- 水野正好編1982「向原古墳群」大山町教育委員会
- 和田晴吾1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社

## 2 調査成果のまとめ

梅田六ツ塚遺跡では調査の結果、古墳4基をはじめとする遺構を検出した。また、全体量は少ないが縄文時代から近世以降に至る遺物を確認している。ここでは、調査成果を時代毎に概観する。

### 弥生時代以前

弥生時代以前に明確に帰属する遺構は確認されていないが、SK1は形態的特徴から落とす穴と考えられる。また、遺構には伴わないが、包含層、および表土から出土した遺物の中には、少数ながら当該期のものがみられる。縄文時代の遺物としては、後期のものと思われる粗製深鉢(第150図16・17)のほかは量も少なく、小片のため図化できなかった。また、第5節で述べたように黒曜石製を主体とした石器群が一定数出土しており、主に調査地南半の緩斜面上で石器を製作していた可能性が考えられる。弥生時代の遺物も包含層、表土から出土している。土器は前期に該当する突帯文土器や、中期に至る遺物が確認できるが、多くが小片で数量的にも少ない。石器は磨製石斧、打欠石錘等が出土しており、当該期に属するものと考えられる。

### 古墳時代

古墳4基を調査した。そのうち15号墳は6世紀前葉、16号墳は6世紀中葉に築造されたことが判明した。前項で詳述しているが、調査の結果、両古墳の埋葬施設や墳丘構築方法について、いくつかの知見が得られた。埋葬形態については、15号墳は箱式石棺、16号墳は明確ではないが、いずれも堅穴系の埋葬施設である。次に両古墳の埋葬施設床面の位置に着目すると、15号墳は基盤層付近であるのに対し、16号墳は墳丘盛土中となり、変化していることが判明した。また、墳丘構築方法についてみると、類似点はいくつか認められるものの、総じて16号墳の方が粗雑な構築手法であることが窺われた。このように、時期変遷に対応した古墳構造の変化を辿ることのできる事例となった。14・19号墳は周溝のみの調査となった。良好な出土遺物が無く、帰属する時期は不明である。

### 古代以降

調査地南側で、配石墓を1基検出した(SX1)。墓壇中に大小の礫が平面「コ」字状に配され、礫群に囲繞された部分を埋葬施設としたと考えられる。配石列の中には埋土上に据えられただけのものもあり、手法は粗雑である。墓壇底面から鉄製小刀が出土しているほかは遺物が無く、帰属時期については古代、もしくは中世に属する可能性も考えられる。

調査地北側・中央部では溝(SD1～15)を検出した。一部の例外はあるが、溝埋土中には砂礫の堆積が無く、流水の痕跡は窺えない。また、SD12のように、ほぼ直角に屈曲するものもあることから、何らかの範囲を区画する溝としての機能も考えられるが、確証は無い。溝のいくつかは重複関係を有し、埋土や走向からある程度グループ分けが可能であるが、遺物の出土がわずかであるため各溝の詳細な時期を特定できなかった。ただ、近年の耕作に伴う溝と比較すると走向が類似しており、現代に営まれた遺構群である可能性が考えられる。

飛鳥～平安時代の遺物は、15・16号墳の周溝上層で認められる。続く中世、近世以降の遺物は表土・撈乱土中でわずかであるが出土している。

以上、調査成果について概観してきた。遺構密度や遺物量は希薄であったが、調査した古墳のうち、15・16号墳は墳丘や埋葬施設に調査が及び、様々な知見を得ることができた。当地域における後期古墳群の様相を検討していくうえで重要な資料となると考えられる。周辺の調査事例が増加すれば、さらに多くの視点での検討が可能になるとと思われる。今後の資料蓄積に期待したい。(加藤)



表58 梅田六ツ塚遺跡出土土器観察表

No.	遺構・地区 層位名	MFI PL	種類 器種	法量(cm)	手 法 上 の 特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	15号墳棺内	第13204 PL.85	須恵器 鏡板	口径6.4 最大厚13.5 部高25.2	外面口縁部回転ナデ。体部ナデ後縁目・ケズリ後ナデ。 内面口縁部回転ナデ。	密	良	内外面黄灰色	
2	15号墳棺内	第13204 PL.85	須恵器 坏身	口径12.2 部高4.8	外面口縁一腰部回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。 内面回転ナデ。	密	良	内面灰色 外面黄灰色	
3	15号墳棺内	第13204 PL.85	須恵器 盖	口径14.0 部高14.3	外面口縁部・体部回転ナデ。体部ヘラケズリ後穿孔。 内面口縁部・体部回転ナデ。	密(1~3mmの 砂粒を含む)	良	内面緑灰色 外面緑灰色	
4	15号墳埋溝 埋土上層	第13204 PL.85	須恵器 坏差	口径11.0 部高4.1	外面口縁部・体部回転ナデ。体部ヘラケズリ後ナデ。 内面口縁部・体部回転ナデ。	密	良	内外面灰白色	
5	15号墳埋溝 埋土上層	第13204 PL.86	須恵器 高台坏	底径9.8φ 部高3.2△	外面体部・高台回転ナデ。底部回転ヘラケズリ後ナデ。 内面回転ナデ。	密	良	内外面灰色	
6	15号墳埋溝 埋土上層	第13204 PL.86	土師器 移動式甕	底径25.6φ 部高8.0△	外面胴部ハケ・担面比底。下帯粗雑な横方向ナデ。 内面ヘラケズリ。	やや密	良	内面にぶい・黄褐色 外面明黄褐色・褐色色	
7	16号墳 墳土	第14004 PL.86	須恵器 坏身	口径13.4 部高5.2	外面口縁一腰部回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。口縁一受部 赤色薬料塗布。須恵器片付着。底部自然釉。須恵器片付着。 内面回転ナデ。赤色薬料塗布。	密	良	内外面灰色	
8	16号墳 表土	第14004 PL.86	須恵器 鏡板	部高4.7△	外面タタキ後縁目。 内面タタキ。	密	良	内外面緑灰色	
9	16号墳埋溝 埋土上層	第14004 PL.86	須恵器 高台坏	底径10.2φ 部高7.0△	外面体部・腰部回転ナデ。体部貼付突帯。 内面体部・腰部回転ナデ。	やや密	良	内外面灰色	
10	16号墳埋溝 埋土上層	第14004 PL.86	土師器 甕	口径27.0φ 部高8.5△	外面口縁部コロナデ。胴部ナデ。 内面口縁部コロナデ。胴部ヘラケズリ。	密砂粒を含む	良	内外面明黄褐色・褐色	
11	16号墳埋溝 埋土上層	第14004 PL.86	土師器 甕	口径22.4φ 部高4.5△	外面ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	内外面明黄褐色・黄褐色	
12	16号墳埋溝 埋土上層	第14004 PL.86	土師器 甕	口径23.6φ 部高6.5△	外面口縁部コロナデ。胴部ナデ。 内面口縁部コロナデ。胴部ヘラケズリ。	密砂粒を含む	良	内外面にぶい・褐色	
13	16号墳埋溝 埋土上層	第14004 PL.86	土師器 甕少	部高7.4△	外面ナデ。 内面ナデ。不明鉄製品付着。	密	良	内面黄褐色 外面にぶい・黄褐色	
14	SD2 埋土	第14604 PL.87	須恵器 甕	底径12.0φ 部高5.1△	外面胴部回転ナデ。底部ナデ。 内面胴部回転ナデ。	密	良	内外面灰色	
15	SD6 埋土下層	第14804 PL.87	須恵器 高坏	部高5.8△	外面腰部回転ナデ。内面腰部回転ナデ。坏部ナデ。	密砂粒を含む	良	内外面灰白色	
16	M3 表土	第15004 PL.88	縄文土器 深鉢	口径19.8φ 部高13.2△	外面条痕。腐付着。 内面条痕。	やや密(砂粒を 多く含む)	良	内面明赤褐色・褐色 外面赤褐色・にぶい・褐色	17と同一體体か
17	M3 表土	第15004 PL.88	縄文土器 深鉢	底径16.6φ 部高27△	内外面ナデナカ。磨耗著しく調整不明瞭。	やや密(砂粒を 多く含む)	良	内面褐色 外面明赤褐色	17と同一體体か
18	J1 表土	第15004 PL.88	弥生土器 甕	口径23.6φ 部高13.7△	外面口縁部ナデ・腰部部目。胴部ハケ後ナデ・20条の横條沈 溝文・直下1割目。 内面ナデ後ヘラミダシ。	密	良	内面赤褐色 外面赤褐色・黄褐色	
19	K5 表土	第15004 PL.88	弥生土器 甕	部高31△	外面口縁部ナデ・腰部部目。胴部12条の横條沈溝文。 内面ナデ。	やや密	良	内面明赤褐色 外面にぶい・褐色	
20	J・K5 表土	第15004 PL.88	須恵器 甕	口径19.0φ 部高7.9△	外面体部回転ナデ後2条の沈溝。 内面体部回転ナデ。	密	良	内外面灰白色	
21	K5 表土	第15004 PL.88	須恵器 甕	部高5.7△	外面体部回転ナデ。2条の沈溝長。間に割目。 内面体部回転ナデ。	密	良	内外面灰白色	
22	16号墳 表土	第15004 PL.88	須恵器 甕	部高8.3△	外面格子タタキ。 内面ナデ。	やや密	やや	内面黄褐色 外面にぶい・黄褐色	
23	D6 埋瓦土	第15004 PL.88	瓦質土器 羽釜	口径21.4φ 部高6.2△	外面口縁部ナデ。体部粗雑なケズリ・ナデ。 内面ナデ。	やや密	やや	内面灰色・にぶい・黄褐色 外面灰色	
24	E7 埋瓦土	第15004 PL.88	土師質土器 胎筒	口径21.2φ 底径22.0φ 部高3.0△	外面口縁一腰部回転ナデ。底部回転ナデ。 内面回転ナデ。	密	良	内面明褐色 外面褐色	

表59 梅田六ツ塚遺跡出土石器観察表

No.	遺構・地区・層位名	検出・PL	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
S1	J5草壁	第12204・PL.87	局部磨製石斧	頁岩	129	6.5	1.5	180	
S2	15号墳墳丘直土	第13304・PL.85	磨製石剣	頁岩	17.1	4.0	1.1	100	梅田草塚遺跡(湯村ほか2008) S4と接合
S3	S28埋土	第14804・PL.87	石鏃	黒曜石	1.1	0.6	0.4	0.2	先端部破片
S4	S28埋土	第14804・PL.87	磨石	安山岩	11.5	5.5	3.9	480	
S5	表土	第15304・PL.87	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	1.1	円基式
S6	L5表土	第15304・PL.87	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.5	円基式
S7	P5表土	第15304・PL.87	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.7	平基式
S8	N3表土	第15304・PL.87	石鏃	黒曜石	1.7	2.0	0.6	2.1	平基式。磨製石鏃を石鏃に転用
S9	表土	第15304・PL.87	石鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.7	1.2	円基式未製品
S10	N4表土	第15304・PL.87	楕形石鏃	黒曜石	4.2	2.5	1.3	126	
S11	K5表土	第15304・PL.87	スクレイパー	サヌカイト	5.5	5.8	0.8	320	
S12	L5表土	第15304・PL.87	スクレイパー	黒曜石	4.5	6.0	1.5	420	
S13	N3表土	第15304・PL.87	スクレイパー	黒曜石	1.6	2.2	0.5	1.3	
S14	O4表土	第15304・PL.87	刮片	黒曜石	2.7	1.3	0.3	0.6	加工痕あり
S15	L4表土	第15304・PL.87	刮片	安山岩	3.8	3.1	0.4	5.5	
S16	M4表土	第15304・PL.87	磨製石斧	頁岩	5.9	3.1	1.1	29.6	
S17	M4表土	第15304・PL.87	石鏃	安山岩	5.8	4.4	1.7	66.0	

## 【参考文献】

湯村 功ほか2008「梅田草塚遺跡IV」鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書23 鳥取県埋蔵文化財センター

表60 梅田六ツ塚遺跡出土金属器観察表

No.	遺構・地区・層位名	検出・PL	器種	法量 (cm・g)	形態・手法上の特徴	備考
F1	16号墳表土	第14004・PL.86	鉄鏃	残存長6.0 最幅0.9 根部幅1.2 基部幅0.5 重さ128	台形筒	
F2	16号墳表土	第14004・PL.86	棒状鉄製品	残存長7.4 最大幅0.7 最大厚0.4 重さ118		
F3	SX1底面直土	第14304・PL.87	小刀	残存長22.9 最大幅2.5 最大厚0.3 重さ80.7	両側	
C1	15号墳周溝埋土	第15004・PL.88	鍔首	最大長11.4 最大幅0.9 最大厚0.9 重さ8.6		新製